（独立行政法人教員研修センター委嘱事業）

教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

報　告　書

プログラム名	奈良教育大学との連携による小学校若手教員育成研修システム開発 －２年目教員同士の主体的・協働的な学び合いによる「学び続ける教員」の基盤づくり－
プログラムの特徴	本事業は、当県における若手小学校教員の課題を解決するため、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習、いわゆる「アクティブ・ラーニング」（以下「ＡＬ」という。）を取り入れるなどして、子どもたちが主体的に意欲をもって学ぶ授業を構成する力（以下「授業力」という。）を、採用２年目教員同士の主体的・協働的な研修を通して身に付けるシステム（以下「研修システム」という。）を開発し、「学び続ける教員」としての基盤づくりを目標として実施した。 奈良教育大学、県内小学校及び奈良県立教育研究所の３機関による研修システム開発のための委員会（以下「研修システム開発委員会」という。）が中心となって、県内小学校５校を拠点校（以下「地域センター」という。）として指定し、開発を進めた。 開発した研修システムは、県内の採用２年目教員同士が、主体的・協働的な研修（以下「ＡＬ型研修」という。）を行う仕組みと、奈良教育大学で授業改善や授業評価に用いられているアクションリサーチ、ポートフォリオ評価及び授業省察等に関する様々な知見を用いて授業づくりを行う内容との二つの柱から構成されている。 また、平成28年度には、研修システム開発委員会と同様の機能をもたせた「研修システム推進委員会」を設置し、新たに指定する地域センターにおいて、本事業の成果と課題を踏まえつつ研修システムの改善を図ることで、県内全ての小学校若手教員の授業力を向上させる取組を普及・定着させることを目指す。

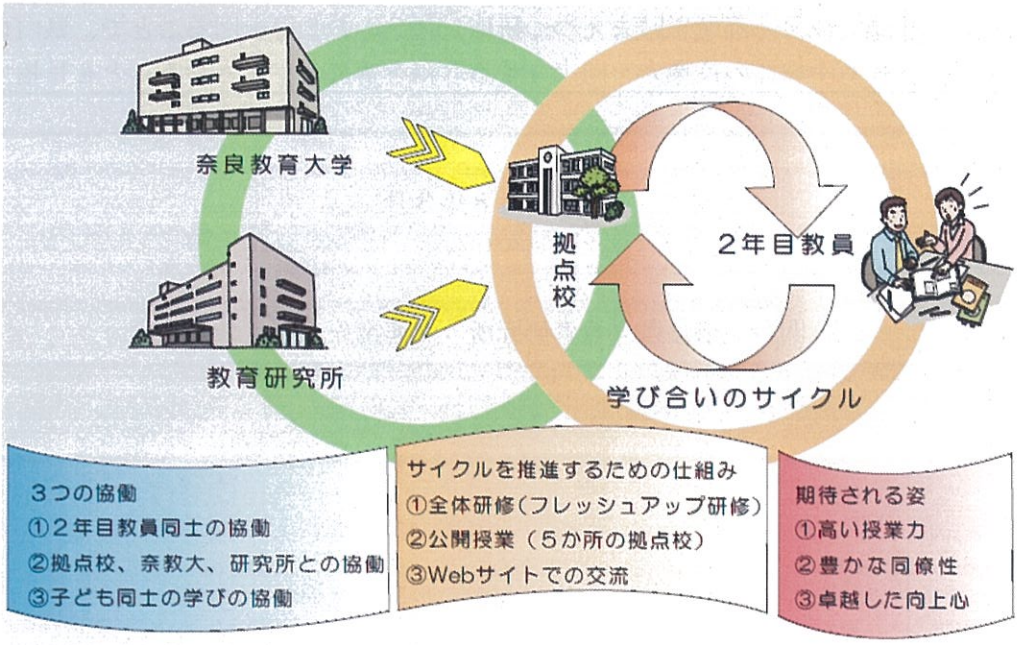
平成２８年３月

機関名　奈良県立教育研究所　　連携先　奈良教育大学

プログラムの全体概要

○　本事業の組織概要

○　本事業のイメージ



Ⅰ　開発の目的・方法・組織

１　開発目的

奈良県の教育課題の一つに、子どもたちの学習意欲の低さがあり、この課題を解決するために高い教科等指導力が求められている。とりわけ、小学校の多くの教員にあっては、採用１年目から学級担任として、学級経営、生徒指導、保護者対応等を行わなければならない上に、全教科にわたる高い指導力を身に付けていなければならず、指導力の向上が必須である。

そこで、本事業を行うに当たり、当県の小学校若手教員の授業における指導の実態を把握するため、２回のアンケート調査を実施した。

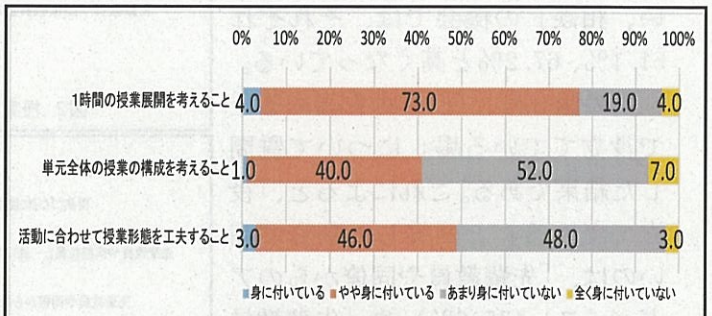


図1　初任者の学習指導技術の習得状況

まず、平成26年５月実施のアンケート調査*1によると、図１の「初任者の学習指導技術の習得状況」の結果から、「１時間の授業展開を考えること」が、「身に付いている」「やや身に付いている」と回答した割合が77.0％であるのに対して、「単元全体の授業の構成を考えること」が、「身に付いている」「やや身に付いている」と回答した割合は41.0％しかなく、初任者は、１時間の授業を組み立てることが概ねできても単元全体の授業の構成を考える力が弱いことが課題として確認できた。また、「活動に合わせて授業形態を工夫すること」が、「身に付いている」「やや身に付いている」と回答した割合は49.0％で、授業内容にふさわしい学習形態を適切に選び、それによって授業を工夫する力が弱いことも課題として確認できた。

若手教員の、小学校の教員全体数に占める割合が大きくなっている現状において、これらの課題を解決することは喫緊の課題であるが、当教育研究所で実施している小学校初任者研修における教科等指導に関する研修としては、学習指導要領の理解や評価方法等の工夫改善に関する講義・演習など、教員として最低限必要な能力を身に付けさせるための研修を中心に行っており、学校等をフィールドにして授業力を高めさせるような研修を行うまでには至っていなかった。

以上のことから、子どもたちの学習意欲を向上させるため、単元全体の授業を適切に構成し、授業内容にふさわしい授業形態を選択する力を身に付けさせることが、当県の小学校若手教員における共通の課題と捉えた。

また、ＯＪＴの場となる学校においては、教員の年齢構成の不均等によって、経験豊かな教員の知識や技能の継承が日常的に活発に行われているとは言い難く、さらに、児童の減少に伴う学校の小規模化により、教員が互いに学び合ったり、協働的に授業づくりに取り組んだりするような同僚性を培いにくい環境であった。

そこで、小学校２年目教員と２年目教員勤務校の学校長を対象とした事前アンケート調査*2を平成27年５月に実施し、小学校初任者研修を終えた２年目教員の授業力の育成状況を調査した。

図２は、授業力を高めるための情報収集の場について質問した結果である。これによると、「授業力を高めるための情報収集の場の活用度」についての質問に対して、「活用している」と回答し

*1　小学校初任者を対象に行ったアンケート調査
奈良県立教育研究所（平成26年５月）「小学校若手教員の研修状況等実態調査報告（調査報告）」
http://www.nps.ed.jp/nara-c/gakushi/kiyou/h26/02_kiyou_kawaguchi.pdf

*2　小学校２年目教員と２年目教員勤務校の学校長を対象としたアンケート調査
奈良県立教育研究所（平成27年５月）「奈良教育大学との連携による小学校若手教員育成研修システム開発事業に係る事前アンケート」（未公開）
（配布数：２年目教員151人・回収数135人・回収率89.4％／学校長104人・回収数97人・回収率93.3％）

た割合は、「教育研究所などでの授業づくりに関する研修」や「校外での研究会活動など」の機会では、いずれも13.0%であるのに対して、「校内での学年会、研究授業など」や「先輩教員や同僚教員との話合い、相談」の機会では、それぞれ51.1%、67.2%と高くなっている。

次の図３は、「授業力を高める上で役立てている場」について質問した結果である。これによると、「役立てている」と回答した割合が高いのは、「先輩教員や同僚からのアドバイス」（75.6%）や「先輩教員や同僚教員と一緒に学び合う場」（60.8%）であった。

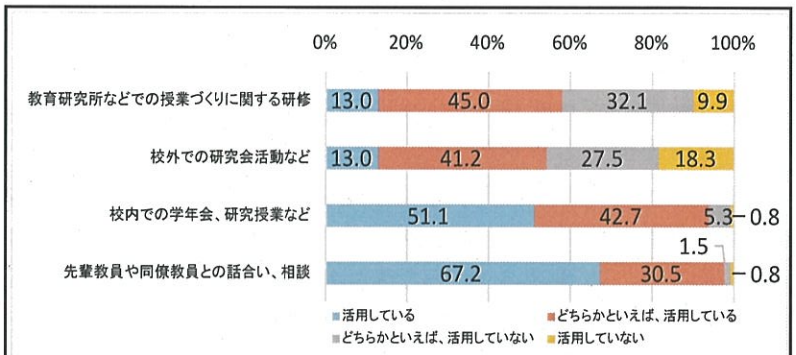


図2 授業力を高めるための情報収集の場の活用度（2年目教員）

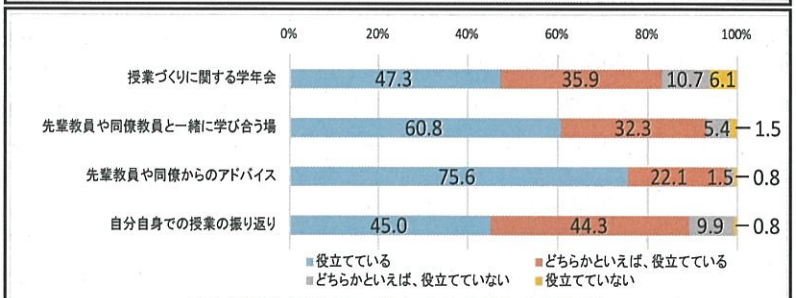


図3 授業力を高める上で役立てている場（2年目教員）

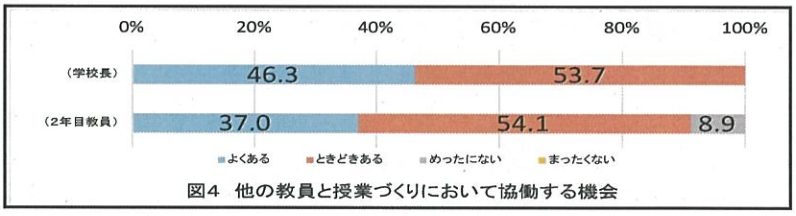


図4 他の教員と授業づくりにおいて協働する機会

図２及び図３の分析から、校外での研修等によって授業力の向上を図る機会としてのいわゆるＯｆｆ－ＪＴよりも、校内での日常的な業務の中で授業力の向上を図る機会としてのＯＪＴの方を、県内の２年目教員は授業力を高める情報収集の場として活用し、役立てていることが分かった。

さらに、図４は、２年目教員には、自身が「他の教員と授業づくりにおいて協働する機会」について、また、学校長には、若手教員の「他教員との授業づくりにおける協働の機会」について、それぞれ質問した結果である。これによると、他の教員と協働する機会が「よくある」と回答した２年目教員の割合は、37.0%と４割に満たない結果であり、学校長の回答の割合でも、46.3%にとどまった。

以上のアンケート調査の分析から、２年目教員は、授業力を高めるために、同僚及び先輩の教員からの知識・技能の伝承の機会や教員同士が学び合ったり協働的な授業づくりを行ったりする機会を求めているにもかかわらず、それらが日常的に活発に行われているとは言い難い状況であり、このことを当県における若手教員育成に係る共通の課題として確認できた。

そこで、これらの二つの課題を解決し、若手教員が高い授業力を獲得するためには、若手教員自らがＡＬ型研修を日常的・長期的に体験することが有効であるという仮説の下、従来の当教育研究所での集合・一斉研修の形態ではなく、県内五つの小学校を拠点として、様々な課題を解決するため採用２年目教員同士が授業改善に取り組むＡＬ型研修の仕組みと奈良教育大学での授業改善や授業評価に用いられているアクションリサーチ、ポートフォリオ評価及び授業省察等に関する様々な知見を用いて授業力を高める内容との二つの柱から構成する研修システムを開発することとした。

本事業を通して、小学校若手教員の授業力を高め、豊かな同僚性を培い、卓越した向上心を育み、当県の教育課題を解決するための資質・能力の向上を図るとともに、それぞれの勤務校において協働的な学びを展開させるための校内研修等におけるキーパーソンとして活躍する人材を育成することを目指した。

２　開発の方法

本事業において、まず、奈良教育大学、県内小学校及び当教育研究所の３機関による研修システ

ム開発委員会を設置し、県内小学校を地域センターに指定するとともに、それぞれにおいて、ＡＬ型研修の機会を提供し、若手教員の授業力向上を図ることとした。地域センターは、小学校２年目教員の複数配置校とし、地域等を配慮した上で、県内小学校５校（北部Ａ小学校、北部Ｂ小学校、中部Ｃ小学校、中部Ｄ小学校、南部Ｅ小学校）を指定した。なお、奈良教育大学と連携をするのは、教員養成を行っている教育大学と、教員育成・研修を行っている学校及び研修機関とが連携することにより、養成から育成までの長期的スパンで、教員の資質・能力の向上を支援することができると考えたからである。

研修システムの開発は、センター研修を通して行った。センター研修は、「センター研修Ⅰ」及び「センター研修Ⅱ」で構成し、センター研修の運営のために、各地域センターの小学校長、奈良教育大学教員及び当教育研究所所員で構成するプロジェクトチーム（以下「ＰＴ」という。）を、各地域センターごとに設置した。

「センター研修Ⅰ」では、各地域センターにおいて、そこに勤務する複数の２年目教員を対象に、研修を日常的・長期的に行った（月１回×４か月×５か所）。この研修は、地域センターごとに奈良県における小学校若手教員の共通の課題を踏まえた個別の課題を設定し、２年目教員がそれぞれの課題を解決するために、互いに学び合ったり、協働で授業改善に取り組んだりするＡＬ型研修の仕組みを構築するものであり、この仕組みを通して、授業力向上につなげ、「学び続ける教員」としての基盤をつくることをねらいとした。その際に、奈良教育大学において、授業改善や授業評価に用いられているアクションリサーチ、ポートフォリオ評価及び授業省察等に関する様々な知見を用いて研修を行った。

「センター研修Ⅱ」では、「センター研修Ⅰ」において形成されたＡＬ型研修の仕組みを他の２年目教員にも体験させることによって、県内全ての２年目小学校教員の授業力向上を図ることをねらいとした。まず、「センター研修Ⅰ」における授業の記録映像、授業研究の様子及びＰＴによる指導・助言の内容等を、県内全ての２年目小学校教員に、アクセスを制限されたWebサイト等で公開するとともに、情報ネットワークの中においても意見交換・質疑応答を行い、協働的な学びを促進させることで、ＡＬ型研修の仕組みを提供することとした。さらに、当教育研究所が行うフレッシュアップ研修（２年次研修）と連携し、県内全ての２年目小学校教員（151名）を30名程度の五つのグループに分け、そのグループの教員が最寄りの地域センターに集合して、ＡＬ型研修の仕組みを体験する参加型研修（１回×５か所）も行った。

また、事後アンケート調査を実施することで、本事業を検証するとともに、そこから得られた成果と課題を踏まえ、平成28年度には、研修システム開発委員会と同様の機能をもたせた「研修システム推進委員会」を設置し、新たに地域センターを指定し、本事業で開発した研修システムの改善を図る予定である。そうした取組を通して、今後は、県内の小学校に若手教員育成のためのメンター方式による研修システムを構築し、県内全ての小学校におけるＯＪＴの活性化と授業力向上を目指すこととしている。

３　開発組織

(1)　研修システム開発委員会組織について

○　構成

研修システム開発委員会は、奈良教育大学、県内公立小学校及び当教育研究所の３機関によって構成した。

○　目的

研修システム開発委員会は、「学び続ける教員」としての基盤をつくるため、ＡＬ等を取り入れるなどして授業を構成する授業力を、小学校若手教員自らがＡＬ型研修を通して身に付ける研修システムの開発及び効果検証することを目的とした。

○　任務

研修システム開発委員会は、次に掲げる各内容を任務とした。

- 研修システム開発委員会の運営に関すること
- 研修システム開発に係る指導助言に関すること
- 事業検証及び「事業実施報告書」の作成に関すること
- その他、この事業に関して必要と認めること

○ 組織

研修システム開発委員会は、奈良教育大学、県内公立小学校及び当教育研究所に所属する者を充てた。担当・役割等に関しては下表のとおりである。

No.	所属・職名	氏　名	担当・役割	備　考
	○奈良県立教育研究所			
1	副所長	堀川　忠道	事業全般への助言	顧問
2	参事	土居　正明	奈良教育大学との調整	委員長
3	研修企画係長	山内　雅雄	総務・企画、研修システム開発	委員
4	教育企画係長	乾　修司	総務・企画、研修システム開発	委員
5	教科教育係長	山本　剛	総務・企画、研修システム開発	委員
6	ICT教育係長	金子　博和	総務・企画、研修システム開発	委員
7	研修企画係調整員	井阪　祥美	事業会計全般	委員
8	指導主事	中澤　隆志	研修システム開発	委員
9	指導主事	廣見　敦志	研修システム開発	委員
10	指導主事	西　英樹	研修システム開発	委員
11	指導主事	平松　康明	研修システム開発	委員
12	指導主事	吉川　紀子	研修システム開発	委員
	○奈良教育大学			
13	副学長	宮下　俊也*3	事業全般への助言	顧問
14	教授（教職大学院）	池島　徳大	教育研究所との調整	副委員長
15	教授（教職大学院）	小柳　和喜雄	研修システム開発に係る指導助言	委員
16	准教授（教職大学院）	粕谷　貴志	研修システム開発に係る指導助言	委員
17	准教授（教職大学院）	河﨑　智恵	研修システム開発に係る指導助言	委員
18	専任講師(教職大学院)	北川　剛司	研修システム開発に係る指導助言	委員
19	准教授（教職大学院）	中井　隆司	研修システム開発に係る指導助言	委員
20	准教授（教職大学院）	前田　康二	研修システム開発に係る指導助言	委員
21	教授（教職大学院）	松川　利広	研修システム開発に係る指導助言	委員
22	教授（教職大学院）	山本　吉延	研修システム開発に係る指導助言	委員
23	教授（教職大学院）	吉田　誠	研修システム開発に係る指導助言	委員
24	教授（教職大学院）	吉村　雅仁	研修システム開発に係る指導助言	委員
	○県内小学校			
25	小学校長	各拠点校校長	研修システム開発に係る指導助言	地域センター長

(2) 研修システム開発委員会の実施

研修システム開発委員会の実施内容等については、次のとおりであった。

第１回研修システム開発委員会　　平成27年４月17日（金）

- 地域センター設置及び組織体制の確立

第２回研修システム開発委員会　　平成27年４月27日（月）

- 研究テーマの報告

*3　宮下副学長は、年度途中から現職。

・　センター研修の計画・立案
・　事前・事後アンケート調査の計画・立案

第３回研修システム開発委員会　　平成28年２月25日（木）

・　アンケート調査結果による研修システムの検証及び成果と課題についての協議
・　「事業実施報告書」の内容等についての協議
・　推進委員会の設置準備及び移管作業

(3)　ＰＴの組織体制及び実施状況

五つの地域センターにおけるＰＴの組織体制及び実施状況は下表のとおりであった。

北部Ａ小学校				講師 （上段）奈良教育大学 （下段）奈良県立教育研究所
センター研修	期日	実施日	時間等	
センター研修Ⅰ ○訪問研修 （４日間）	第１日	6月11日(木)	13:30～17:00	教授　松川利広 准教授　中井隆司 指導主事　中澤隆志 指導主事　廣見敦志
	第２日	7月9日(木)	13:00～17:00	
	第３日	9月10日(木)	13:30～17:00	
	第４日	10月22日(木)	13:30～17:00	
センター研修Ⅱ	公　開	11月12日(木)	9:30～16:00	

北部Ｂ小学校				講師 （上段）奈教大教職大学院 （下段）奈良県立教育研究所
センター研修	期日	実施日	内容	
センター研修Ⅰ ○訪問研修 （４日間）	第１日	6月17日(水)	13:30～17:00	教授　吉田誠 講師　北川剛司 研修企画係長　山内雅雄 指導主事　平松康明
	第２日	7月8日(水)	13:30～17:00	
	第３日	9月8日(火)	13:30～17:00	
	第４日	10月14日(水)	13:30～17:00	
センター研修Ⅱ	公　開	11月20日(金)	9:30～16:00	

中部Ｃ小学校				講師 （上段）奈教大教職大学院 （下段）奈良県立教育研究所
センター研修	期日	実施日	内容	
センター研修Ⅰ ○訪問研修 （４日間）	第１日	6月2日(火)	13:30～17:00	教授　池島徳大 准教授　粕谷貴志 研修企画係長　山内雅雄 指導主事　廣見敦志
	第２日	7月6日(月)	15:00～17:00	
	第３日	9月4日(金)	13:30～17:00	
	第４日	10月7日(水)	15:00～17:00	
センター研修Ⅱ	公　開	11月6日(金)	9:30～16:00	

中部Ｄ小学校				講師 （上段）奈教大教職大学院 （下段）奈良県立教育研究所
センター研修	期日	実施日	内容	
センター研修Ⅰ ○訪問研修 （４日間）	第１日	6月26日(金)	13:30～17:00	教授　山本吉延 准教授　河﨑智恵 指導主事　西英樹 指導主事　吉川紀子
	第２日	7月7日(火)	14:45～17:00	
	第３日	9月17日(木)	13:50～17:00	
	第４日	10月15日(木)	15:00～17:00	
センター研修Ⅱ	公　開	11月27日(金)	9:30～16:00	

南部Ｅ小学校				講師 （上段）奈教大教職大学院 （下段）奈良県立教育研究所
センター研修	期日	実施日	内容	
センター研修Ⅰ ○訪問研修 （４日間）	第１日	6月23日(火)	13:30～17:00	副学長　宮下俊也 教授　吉村雅仁 准教授　前田康二 研修企画係長　山内雅雄 指導主事　廣見敦志
	第２日	7月14日(火)	15:00～17:00	
	第３日	10月20日(火)	13:30～17:00	
	第４日	11月24日(火)	15:00～17:00	
センター研修Ⅱ	公　開	12月3日(木)	9:30～16:00	

Ⅱ　開発の実際とその成果

1　研修システムの内容等

(1)　研修対象

県内小学校に勤務する採用２年目教員（151名）を研修対象とした。

※　うち、地域センターとして、北部Ａ小学校３名、北部Ｂ小学校２名、中部Ｃ小学校３名、中部Ｄ小学校３名、南部Ｅ小学校２名、以上13名。

(2)　研修日程及び内容等

研修の日程及び内容等については、下表のとおりであった。

時期等	内　　容	目的・目標
４月	研修システム開発委員会の開催（２回） （委員の構成） ○奈良教育大学教員、県内小学校長（北部・中部・南部から選出）及び当教育研究所所員等 （内容） ○地域センターを設置した。 ○センター研修の計画・立案を行った。 ○事前・事後アンケート調査の計画・立案を行った。	【目　的】 ○研修システムの開発を目指して、奈良教育大学、県内小学校及び当教育研究所が連携・協働する体制を確立する。 ○事前・事後アンケート調査用紙等を作成する。
５月	事前アンケート調査の実施	【目　的】

	（対象） ○県内全ての小学校２年目教員 ○２年目教員の勤務する小学校長	○研修システムの検証に生かすため、県内の２年目小学校教員における授業等に関する実態を把握する。
６月 ～ 11月	センター研修の実施（研修システムの開発） （ＰＴの構成：各地域センター５名） ○奈良教育大学教員、各地域センターの小学校長及び当教育研究所所員等 (1)「センター研修Ⅰ」(月１回×４か月×５か所) （内容） ○複数の２年目教員が、課題解決のためにＡＬ型研修を行った。 (2)「センター研修Ⅱ」(随時、１回×５か所) （内容） ○「センター研修Ⅰ」における授業の記録映像、授業研究の様子及びＰＴによる指導・助言の内容等を、県内全ての２年目小学校教員に、アクセスを制限されたWebサイト等で公開するとともに、情報ネットワークの中においても意見交換・質疑応答を行い、ＡＬ型研修を促進させた。 ○県内全ての２年目小学校教員（151名）を30名程度の五つのグループに分け、そのグループの教員が最寄りの地域センターに集合して、ＡＬ型研修の仕組みを体験する参加型研修を行った(１回×５か所)。	【目　的】 ○教員が互いに学び合う仕組みと奈良教育大学の知見を用いた研修内容とを、研修システムとして開発する。 ○奈良教育大学の優れた知見を研修に導入する。 評　価 ○研修システムを開発することで、小学校若手教員自らが、ＡＬ型研修を通して授業力を身に付ける仕組みができる。 ○研修システムを開発することで、ＡＬなどを取り入れた授業改善が進み、子どもたちが主体的に意欲をもって学ぶことができる。 ○奈良教育大学で授業改善や授業評価に用いられているアクションリサーチ、ポートフォリオ評価及び授業省察等に関する様々な知見を研修システムに用いることができる。
12月	事後アンケート調査の実施 （対象） ○県内全ての２年目小学校教員 ○２年目教員が勤務する小学校長	【目　的】 ○センター研修の成果と課題を分析・検証する。
１月	研修システム開発委員会の開催（１回） （内容） ○事前・事後アンケート調査の分析・検証を行うとともに、５か所で行った研修システムのプロセス等を整理し、研修システムの成果と課題をまとめた。 ○「事業実施報告書」の内容等について協議した。 ○研修システム推進委員会の設置準備及び移管作業を行った。	【目　的】 ○アンケート調査の分析結果によって研修システムを検証する。 ○アンケート調査の分析結果や研修システムのプロセス等の整理・検討を、「事業実施報告書」の内容等に生かす。 ○平成28年度以降に研修システム推進委員会を設置するための準備をする。 ○平成28年度以降も、研修システムを実施することで、県内全域に普及・定着させるための仕組みができる。
３月	「事業実施報告書」の作成・配布 （内容） ○「事業実施報告書」を作成し、県内全ての小学校に配布した。	【目　的】 ○本事業の成果として、「事業実施報告書」を作成し、配布する。 ○「事業実施報告書」の配布によって、研修システムを、県内小学校で普及・定着させる。

(3) 期待される若手教員像

本事業におけるゴールとしての目指す教員像を、次のとおりに設定した。

① 〔高い授業力〕

ＡＬ等を取り入れるなどして、子どもたちが主体的に意欲をもって学び合う授業を構成する力を身に付けた教員

② 〔豊かな同僚性〕

日常的・長期的な教育活動の中で、教員自らがＡＬ型研修を用いて、協働的に学び合う同僚性を身に付けた教員

③ 〔卓越した向上心〕

教員として学び続けていくことのできる力をもった教員

(4)　センター研修の概要

センター研修の概要を以下に示す。

センター研修Ⅰ

○　各地域センターで勤務する２年目教員を対象に、研修を日常的・長期的に行う。（月１回×４か月×５か所）

○　地域センターごとに奈良県における小学校若手教員の共通の課題を踏まえた個別の課題を設定し、複数の２年目教員が、それぞれの課題を解決するために、互いに学び合ったり、協働で授業改善に取り組んだりする仕組みを構築する。この仕組みを通して「学び続ける教員」としての基盤をつくり、授業力向上につなげていくことをねらいとする。

○　奈良教育大学で授業改善や授業評価に用いられているアクションリサーチ、ポートフォリオ評価及び授業省察などの様々な手法によって効果的に研修を行う。

○　研修システムの開発は、センター研修を通して行う。センター研修は、「センター研修Ⅰ」及び「センター研修Ⅱ」から成り、これらの運営のために、各地域センターごとに「ＰＴ」を設置する。

このＰＴは、奈良教育大学教員、各地域センターの学校長、教育研究所所員で構成する。

センター研修Ⅱ

○　「センター研修Ⅰ」における授業の記録映像、研修の様子と成果及び指導・助言の内容等を、県内全ての小学校２年目教員にアクセスを制限されたWebサイト（フレッシュアップ研修Webサイト「学びの交流」）で公開し、それを通して情報ネットワークの中で意見交換・質疑応答などを行う。

○　県内全ての小学校２年目教員を30名程度の五つのグループに分け、最寄りの地域センターに集合させて、参加型研修（１回×５か所）を実施する。

○「センター研修Ⅰ」において形成された学び合う仕組みを「センター研修Ⅱ」で普及・定着させることで、各地域センターで勤務する２年目教員はもちろん、県内全ての小学校２年目教員の授業力向上を図ることができる。このことは、２年目教員が各校の校内研修のキーパーソンとして協働的な学びを展開させることや各学校のＯＪＴの活性化などにもつなげることができると考えている。

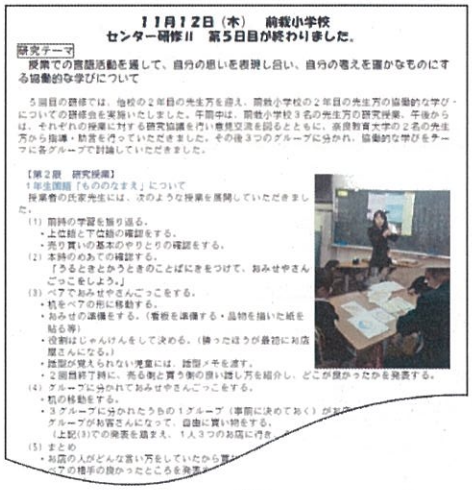
○　教員の主体的・協働的研修の仕組み、子どもたちが主体的に意欲をもって学ぶ授業づくりをまとめた「事業実施報告書」を作成し、県内全ての小学校に配布する。

(5)　Webサイトにおける「学びの交流」の開発

センター研修ⅡのWebサイトによる研修の概要を以下に示す。

教育研究所のWebページのコンテンツ内にパスワードによりアクセスを制限されたフレッシュアップ研修Webサイト「学びの交流」がある。

各小学校のボタンをクリックすると、地域センターの様子が分かるページが表示される。



11月12日（木）　前載小学校
センター研修Ⅱ　第5日目が終わりました。

研究テーマ
授業での言語活動を通して、自分の思いを表現し合い、自分の考えを豊かなものにする協働的な学びについて

「研修の様子と成果」のＰＤＦアイコンをクリックすると、センター研修の授業や研究協議の様子と成果がまとめられた文書を閲覧できる。

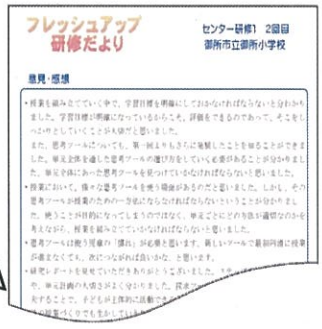
「研修の様子と成果」のＭＯＶアイコンをクリックすると、センター研修の授業や研究協議の様子を編集した記録映像を視聴できる。

「意見・感想」のＭＡＩＬアイコンをクリックすると、送信フォームから、センター研修の意見や感想を送ることができる。（送り先は教育研究所）

２年目教員の意見・感想（一部抜粋）

- 同期の人の頑張りや授業の工夫、子どもたちとの関わりを見て、私ももっと自分から学んでいこうと思いました。
- 言葉や数字、式、図、数直線などを用いて考え、表現するという児童が主体的に活動できる場を与え、視覚的理解を促すような支援を行っておられて素晴らしいなと感じました。訪問できる日を楽しみにしています。
- ３人の先生が共に授業をされている様子を見て、既に同僚性が高まっていて、とても素敵だと思いました。
- 同期の授業実践を共有することができ、いいなあと思いました。手軽に視聴できる仕組みがすごいです。

「フレッシュアップ研修だより」のＰＤＦアイコンをクリックすると、２年目教員の意見や感想、それに対する大学教員の助言等をまとめた文書が閲覧できる。



フレッシュアップ研修だより
センター研修1　2回目
御所市立御所小学校

意見・感想

Ⅲ　連携による研修についての考察

(1)　本事業の検証

本事業を行うに当たり、若手教員が高い授業力を獲得するためには、若手教員自らがＡＬ型研修を日常的・長期的に体験することが有効であるという仮説の下、従来の当教育研究所での集合・一斉研修の形態ではなく、県内五つの小学校を拠点として、採用２年目の小学校教員同士が授業改善に取り組むＡＬ型研修の仕組みと奈良教育大学のもつ様々な知見を用いて授業力を高める内容との二つの柱から構成する研修システムの開発を行った。

したがって、本事業の効果を考察するに当たり、この仮説の有効性を検証する。

なお、検証するに当たり、事前アンケート調査と、事前アンケートと同じ質問項目で実施した事後アンケート調査*4の二つのアンケート調査の結果を分析するとともに、各センター研修の振り返りシート及び地域センターとなった県内五つの小学校長からの聞き取り調査の結果を踏まえることとする。

最初に、２年目教員の、協働して授業づくりに取り組む機会の変容について検証したい。

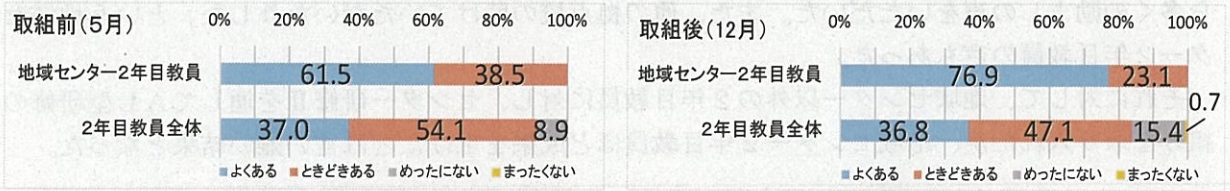


図５　他の教員と授業づくりにおいて協働する機会

※「２年目教員全体」とは、地域センター以外の２年目教員を指す。以下、同じ。

図５は、「他の教員と授業づくりにおいて協働する機会」について質問した結果である。これによると、「他の教員と授業づくりにおいて協働する機会」が「よくある」と回答した割合は、地域センター２年目教員では取組前から取組後に15.4ポイント上昇しているのに対して、２年目教員全体では、その割合が0.2ポイント微減した。

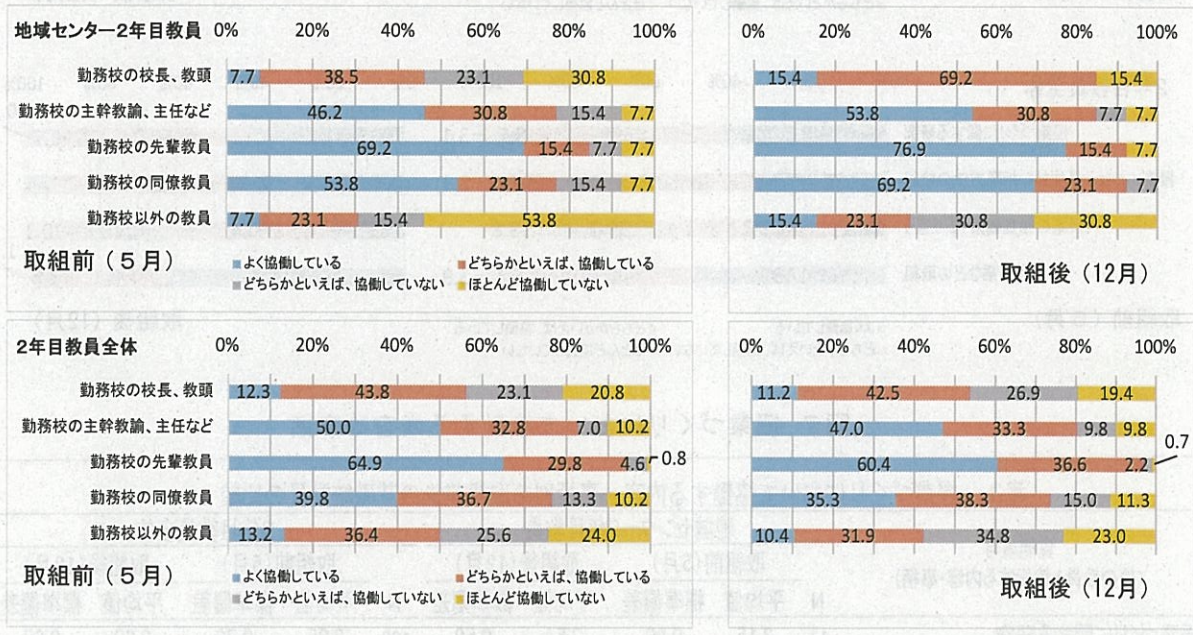


図６　授業づくりにおいて協働している人物

*4　小学校２年目教員と２年目教員勤務校の学校長を対象としたアンケート調査２
奈良県立教育研究所（平成27年12月実施）「奈良教育大学との連携による小学校若手教員育成研修システム開発事業に係る事後アンケート」（未公開）
（配布数：２年目教員151人・回収数137人・回収率90.7％／学校長104人・回収数95人・回収率91.3％）

図６は、「授業づくりにおいて協働している人物」について質問した結果である。これによると、「よく協働している」「どちらかといえば、協働している」と回答した割合では、２年目教員全体では、取組前から取組後において５項目のうち３項目で減少するなど、大きな上昇が見られなかったが、地域センター２年目教員では、全ての項目においてその割合が上昇した。また、勤務校以外の教員との協働について、「ほとんど協働していない」と回答した地域センター２年目教員の割合は、取組前から取組後に23.0ポイント減った。

図５と図６の分析から、地域センター２年目教員が、センター研修を通して協働する機会が増えるとともに、協働する対象についても幅広くなったのに対して、地域センター以外の２年目教員全体では、協働する機会及び協働する対象に関して、大きな変容がないことが分かった。

これは、センター研修Ⅰにおいて２年目教員同士のＡＬ型研修の仕組みを取り入れたことと、このＡＬ型研修が、地域センターの管理職や所属学年の主任、先輩教員をはじめ、地域センター以外の教員等にも広がって取り組まれてきたこととによる成果と考えられる。センター研修Ⅰでの振り返りシートの記述の中に、「フレッシュアップ研修講座でWebサイトの紹介があり、同期の先生から多くの励ましの声をいただいた。また、他の拠点校の助けていただいたりした」という地域センター２年目教員の声もあった。

それに対して、地域センター以外の２年目教員に対し、センター研修Ⅱを通してＡＬ型研修の仕組みを取り入れたが、地域センター２年目教員ほど成果を上げたとは言い難い結果となった。

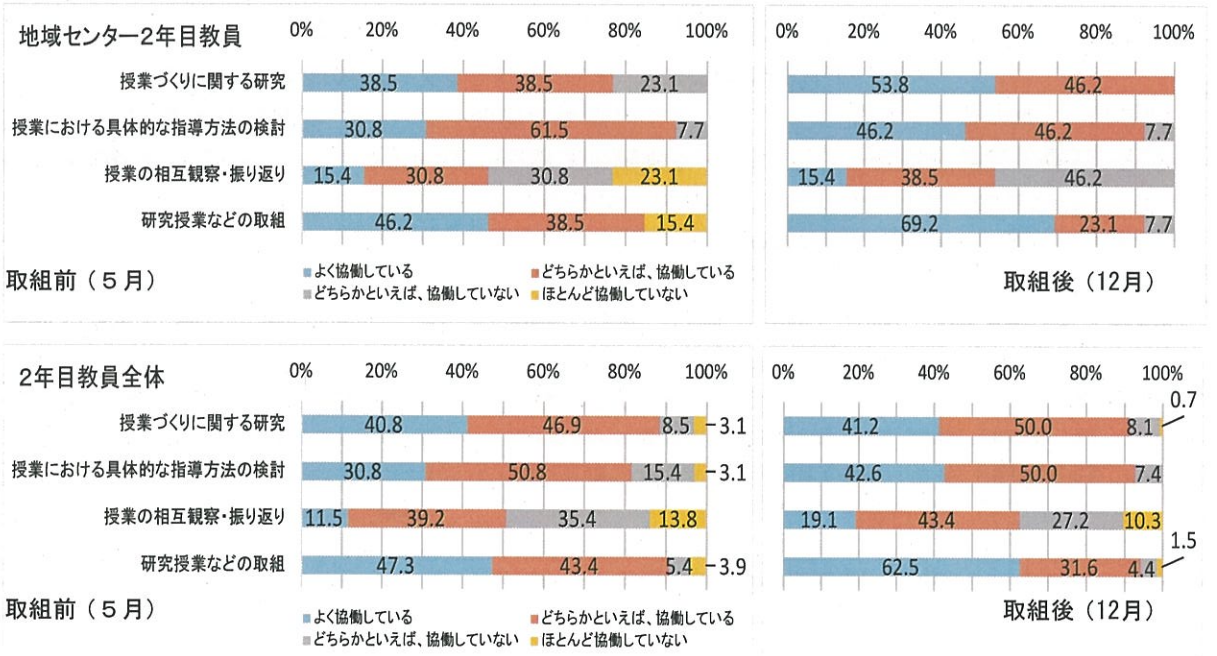


図７　授業づくりにおいて協働する内容や事柄

表１　授業づくりにおいて協働する内容・事柄別の取組前後の基礎統計量の比較

質問項目（他の教員と協働する内容・事柄）	地域センター2年目教員					2年目教員全体				
		取組前(5月)		取組後(12月)			取組前(5月)		取組後(12月)	
	N	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
授業づくりに関する研究	13	3.15	0.80	3.54	0.52	128	3.25	0.76	3.30	0.67
授業における具体的な指導方法の検討	13	3.23	0.60	3.38	0.65	129	3.07	0.78	3.33	0.61
授業の相互観察・振り返り	13	2.38	1.04	2.69	0.75	129	2.45	0.89	2.71	0.90
研究授業などの取組	13	3.15	1.07	3.62	0.65	128	3.32	0.77	3.53	0.66

（各回答を、「よく協働している」を4、「どちらかといえば、協働している」を3、「どちらかといえば、協働していない」を2、「協働していない」を1として数値化している）

次に、図７は、「授業づくりにおいて協働する内容や事柄」について質問した結果である。これによると、「よく協働している」「どちらかといえば、協働している」と回答した割合は、地域セン

ター２年目教員及び２年目教員全体のいずれにおいても、４項目とも取組後に上昇しているが、各回答をそれぞれ数値化して得られた平均値を比較した表１を見ると、地域センター２年目教員では、「授業づくりに関する研究」「研究授業などの取組」が、それぞれ0.39ポイント、0.47ポイント上昇し、２年目教員全体の上昇と比べても、変容が顕著であった。

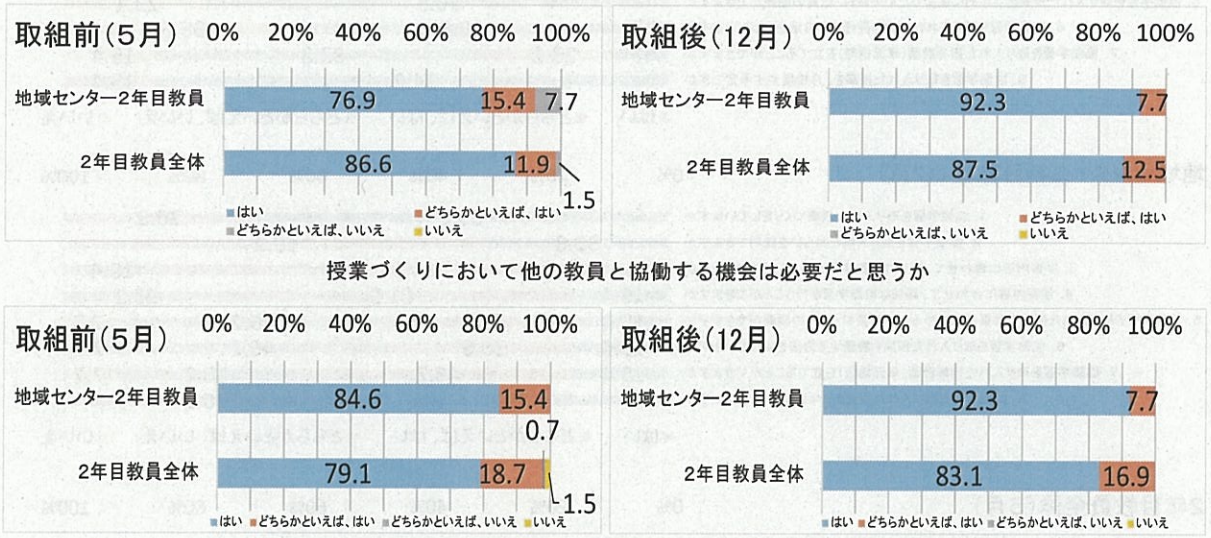


図８　授業づくりにおいて協働する必要性や効果に対する意識

図８は、授業づくりにおいて、教員同士が協働する必要性や効果に対する意識について質問した結果であるが、「授業づくりにおいて他の教員と協働する機会は必要だと思うか」「授業づくりにおいて他の教員と協働したとき、１人でやるよりもよい結果が得られたか」という二つの質問に対して、「はい」「どちらかといえば、はい」と回答したそれぞれの割合は、地域センター２年目教員及び２年目教員全体のいずれも、取組前に比べて取組後に高くなった。

センター研修Ⅱでの参加型研修における、地域センター以外の２年目教員の振り返りシートの記述の中に、

- 授業を始めとして教育活動を行っていく上で、自分以外の目で見てもらい考えてもらうことで、見えていなかったことやよい考えが生まれるのだと思います。教員同士の横のつながりで、相談や協働を行っていくことの大切さを感じました。
- ３人の先生方の思いや工夫などを聞けて興味深かったです。学年集団ではなく、学年の違う同期の先生方で授業を考えることで、多様な視点で話合いができたことが伝わってきて、私もいろいろな先生に相談してみようと思いました。

という感想もあった。

以上のように、２年目教員の、協働して授業づくりに取り組む機会の変容について検証した結果、県内の全ての２年目教員が、協働の必要性や効果を十分に感じながらも、地域センター２年目教員が、協働的に授業づくりに取り組み、自ら同僚性を高めたのに対して、地域センター以外の２年目教員全体では、それが十分であったとは言い難く、両者における成果に差があったことが分かった。

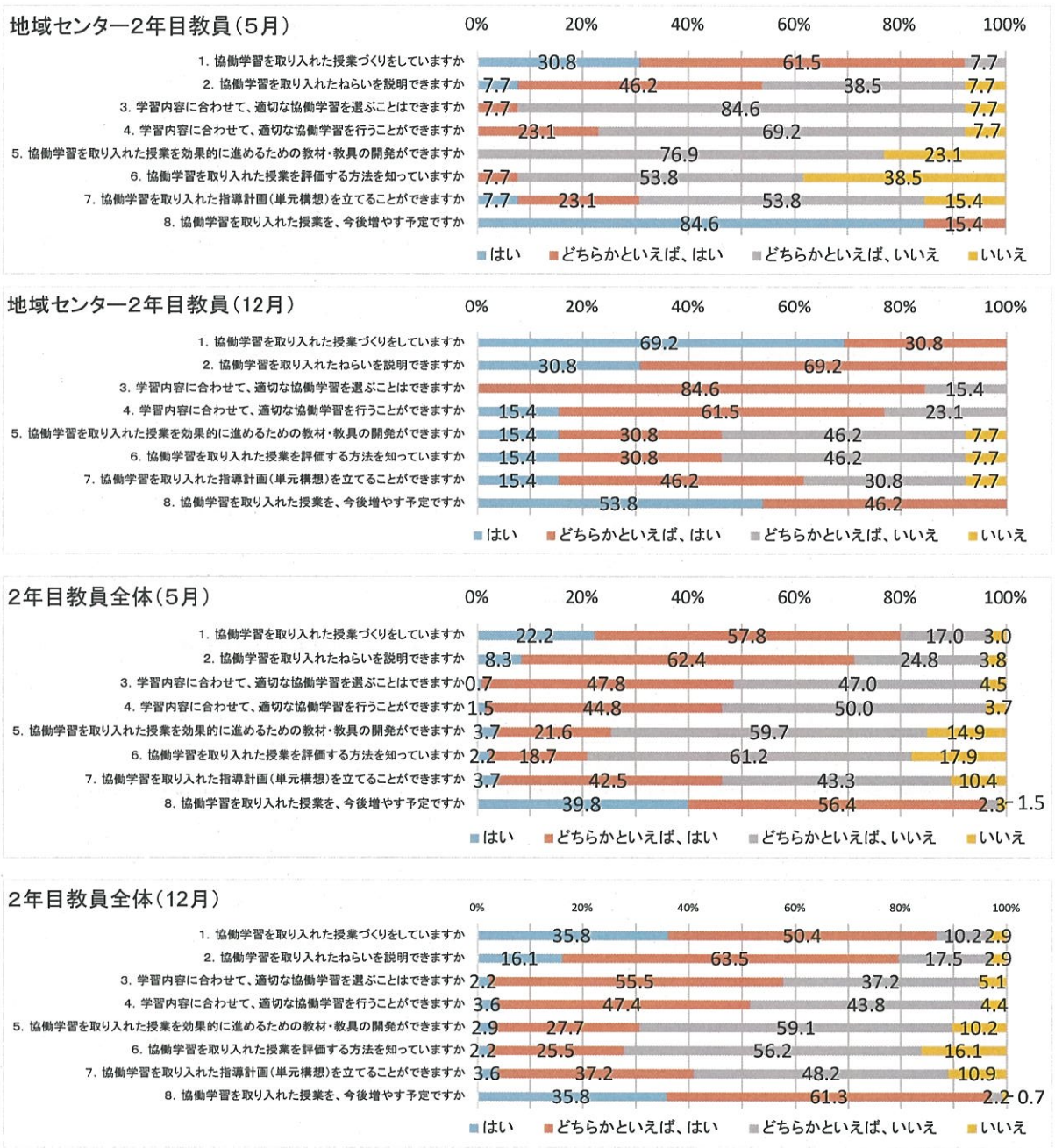


図９　協働学習を取り入れた授業について

次に、この結果を踏まえ、２年目教員の授業力の変容について検証したい。

図９は、協働学習を取り入れた授業の取組状況について質問した結果である。これによると、「協働学習を取り入れた授業について」の８つの質問項目に対して、「はい」「どちらかといえば、はい」と回答した割合は、地域センター２年目教員では、取組前から取組後に平均37.5ポイント上昇した。とりわけ、質問３、４、５は、小学校若手教員の課題の１つであった「活動に合わせて授業形態を工夫すること」に関連する項目であり、また、質問７はもう１つの課題であった「単元全体の授業構成を考えること」に関連する項目であるが、この４項目について、平均51.9ポイント上昇した。一方、２年目教員全体においては、８項目に対して、「はい」「どちらかといえば、はい」と回答した割合は、平均で4.6ポイントの上昇で、特に、二つの課題に関連する４項目では平均で3.5ポイント（質問７に関してはマイナス5.4ポイント）の上昇にとどまった。なお、質問７に関して、２年目教員全体における「はい」「どちらかといえば、はい」と回答した割合が5.4ポイント下がった原因について分析をしたところ、センター研修Ⅱの中での振り返りシートの中

に、

・協働的な学びの重要性と難しさを改めて感じました。どう教えるかではなく、子どもが何を学ぶかということを意識したいと感じました。課題設定やまとめ方など、課題点はたくさんありますが、改めて試みたいと思います。
・グループで学習する活動は、一人でできることをやらせても意味が無いという話を聞き、自分が今までしてきたグループ活動は間違っていたのだと感じました。この研修で、協働的な学習とは何かを改めて考えさせられました。

という記述があり、このことから、この原因は、地域センター以外の２年目教員が本事業を通して授業力の向上の難しさに触れたことによって、改めて自分の授業力と向き合い、自分の課題を発見したが、それを解決するまで至らなかった結果であると推察した。

それに対して、地域センター２年目教員の、「協働学習を取り入れた授業について」のアンケート調査の際の回答理由の記述から、

・今回の研修を通して協働学習のよさを学び、協働学習を取り入れることが出来るようになってきたので今後も続けてしっかりと自分のものにしたい。
・子どもがより学びたいと思うようになったから。
・児童の自主的な姿を更に伸ばしていきたいから。
・話合いを楽しみながら学習を進めていき成果を上げることができている。
・２年目研修で去年よりも多く取り入れたことで子どもの成長を感じたため。
・今回の研究授業等で子ども達の活動に深まりがあることがよく分かったため。

などの意見を見出すことができた。ここから、地域センター２年目教員は、授業力の向上の難しさを実感しつつも、センター研修Ｉにおいて ＡＬ型研修に取り組み、その効果を評価すると同時に、今後もＡＬ型研修に取り組んでいきたいという意欲をもつようになったことも分かった。

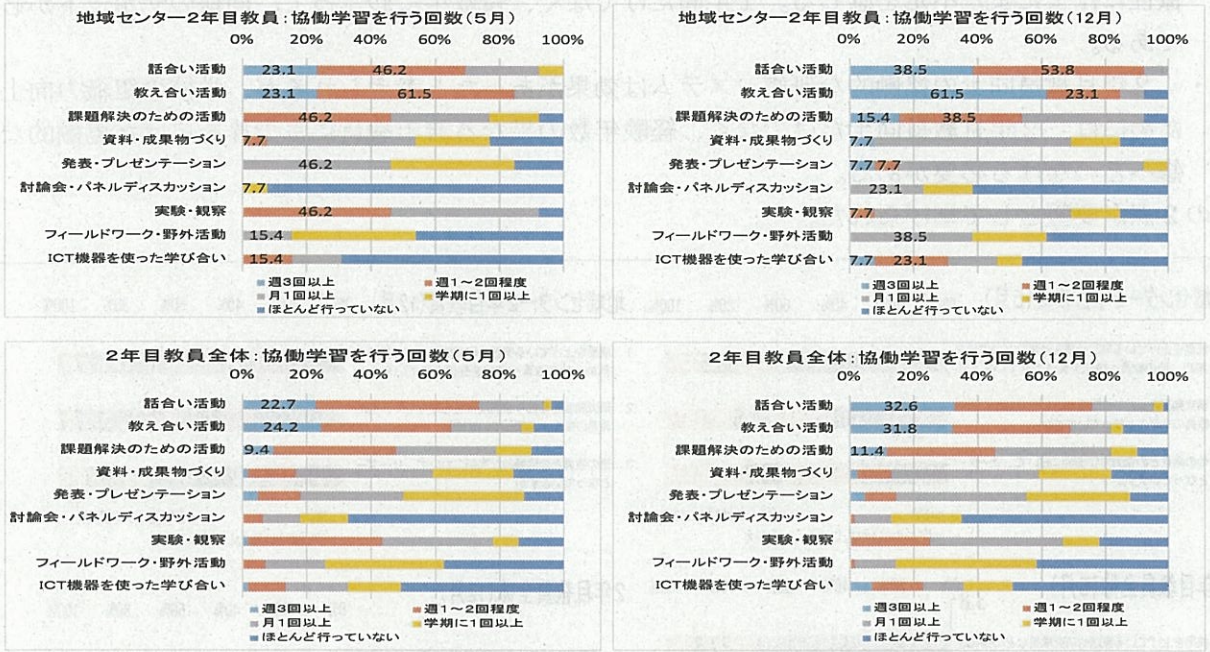


図10 協働学習を取り入れた授業の形態と回数

図10は、「協働学習を取り入れた授業の形態と回数」について質問した結果である。これからは、取組前から取組後にかけて、２年目教員全体よりも地域センター２年目教員の方が、多様な学習活動を通して協働学習を取り入れるように変容したこと、また、その頻度も高くなったこととが見て取れた。とりわけ、「話合い活動」、「教え合い活動」、「課題解決のための活動」の頻度の上昇が顕著であった。

(2)　本事業の成果と課題

以上の検証から得られた、成果と課題についてまとめる。

本事業において、従来の当教育研究所での集合・一斉研修の形態ではなく、県内五つの小学校を拠点として、様々な課題を解決するために採用２年目教員同士が授業改善に取り組むＡＬ型研修の仕組みと奈良教育大学での授業改善や授業評価に用いられているアクションリサーチ、ポートフォリオ評価及び授業省察等に関する様々な知見を用いて授業力を高める内容との二つの柱から構成させる研修システムを用いて、若手教員の授業力を向上させることに取り組んできた。

その結果、若手教員にとって授業力は、日常的・長期的にＡＬ型研修を体験することを通して、獲得していくことが有効であることが証明された。

しかしながら、拠点校となった地域センター２年目教員の意識やスキルの向上は成果として認められたが、２年目教員全体への研修システムによる効果の広がりについては、十分であったとは言い難かった。これは、センター研修Ⅱによってセンター研修Ⅰの学びを普及・定着させることを試みてきたが、その仕組みが単一方向のものであったため、２年目教員にとって受け身的な研修に陥ってしまったことが大きな要因として挙げられる。今後は、２年目教員全体の同僚性の向上、授業力の底上げ、学び続ける教員としての意識向上を目指し、研修システムの成果をどのように普及・定着させ、ＯＪＴの活性化及び教員の授業力向上につなげていくかが課題と考えられる。

また、取組後の12月に、地域センターとなった県内五つの小学校長から、本事業における成果と課題について聞き取り調査を行ったところ、

- 奈良教育大学及び当教育研究所から、地域センター２年目教員への指導助言は授業力向上に効果があったと考えられるが、指導助言を受けた地域センター２年目教員であっても、授業力や同僚性にはまだまだ不足を感じる。１年間だけでなく、複数年にわたって、同様のサポートが必要である。
- ２年目教員同士の協働的な研修システムは効果があったと考えられるが、学校の組織力向上のためには、２年目教員同士だけでなく、経験年数の異なる若手教員にまで枠を広げた協働的な研修へとつなげる必要がある。

の２点が要望として挙げられた。

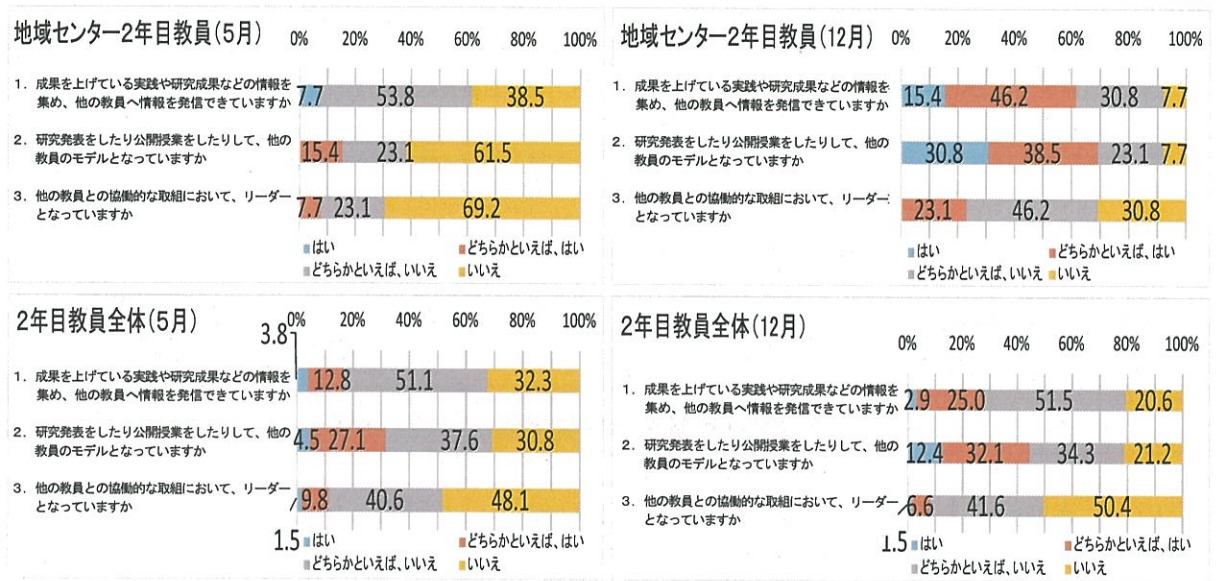


図11 自主的に学び続ける教員としての意識について

次に、県内の２年目小学校教員の、「学び続ける教員」を目指す意識の変容について考察したい。図11は、「自主的に学び続ける教員としての意識について」、三つの質問をした結果である。これ

によると、地域センター２年目教員では三つの質問の全てにおいて、２年目教員全体では質問１、質問２の２項目において、取組前から取組後にかけて、「はい」「どちらかといえば、はい」の回答の割合が上昇している。このことから、本事業を通して、県内の２年目教員の、自主的に学び続ける教員としての意識が高まったことも証明された。

最後に、本事業の今後の在り方について言及しておく。

本事業で開発した研修システムの成果と課題を踏まえ、地域センターだけでなく県内全ての小学校に同じ効果のＡＬ型研修を実施できる研修システムの開発と、採用２年目だけでなく若手小学校教員に研修システムの成果を普及・定着させることのできる仕組みの構築とが必要であることが分かった。そのために、例えば、この研修システムの対象を採用２年目及び３年目の小学校教員にまで広げてＡＬ型研修を実施したり、その授業の記録映像、学習指導案等及び指導・助言の内容等を、県内全ての２年目及び３年目小学校教員を対象に、アクセスを制限されたWebサイト等で公開したりすることで、経験年数の異なる教員を対象にした更なるＡＬ型研修の仕組みへと発展させていくことが重要であると考える。さらに、当教育研究所が行うフレッシュアップ研修（２年次研修、３年次研修）と連携し、ＡＬ型研修の仕組みを体験する参加型研修の機会を増やすなど、様々な機会を捉えて研修成果の定着・浸透を目指すことも大切であると考える。

最初に述べたように、小学校の多くの教員にあっては、採用１年目から学級担任として、学級経営、生徒指導、保護者対応等を行わなければならない上に、全教科にわたる高い指導力が望まれている。特に、奈良県の教育課題の一つとして、子どもたちの学ぶ意欲が低いことがあり、この課題を解決するために小学校若手教員の授業力向上が強く求められている中にあって、本事業は、日々の学校業務に疲弊することなく、意欲をもって「学び続ける教員」へと成長していくための一助となったのではないかと考えている。今後も、奈良教育大学との連携により、小学校若手教員を育成するための研修システム開発に取り組んでいくことが重要であると考えている。そして、当県の教育スローガンである、「子どもたちの学ぶ意欲を高め、魅力と活力ある園・学校」づくりを目指し、それぞれの学校においてＡＬ型研修やメンター方式による研修を推進させるためのキーパーソンとして活躍する若手教員の育成につなげていきたい。

なお、各地域センターでの研修の詳細を、次のＶ　資料に添付するので、参考にされたい。

Ⅴ　資料「奈良教育大学との連携による小学校若手教員育成研修システム開発事業」の実際

(1) 北部Ａ小学校

ア　研究テーマ

授業での言語活動を通して、自分の思いを表現し合い、自分の考えを確かなものにする協働的な学びについて

自分の思いを伝えたり、友達と意見交換したり、また、答えを出すまでのプロセスを論理的に説明したりしながら、自分の考えを確かなものにできる子どもを育てるための授業形態（ペア学習やグループ学習）、単元構成の工夫を研究の目的とした。

２年目教員　３名
第１学年　学級担任
第３学年　学級担任
第５学年　学級担任

イ　研究の実際

事前打合せ　ＰＴの顔合わせ、事業概要の共通理解、研究の方向性についての協議

２年目教員への聞き取りから
・１年生なので自分の思いを上手に表現し合うことからスタートしたい。
・話合いをさせても、伝えるだけで、互いの学び合いにはなっていない。
・グループ学習はしているが、全員が取り組めていなかったり、形式的なものになっていたりしていて、深めていくのが難しい。

研究の方向性：児童が言語活動を通して自分の考えを確かなものにしていくような協働的な学びについて、授業形態や単元構成を中心に研究する。

センター研修Ⅰ（1回目　6月11日）

今後の取組の進め方や授業づくりの方向付けを行うための協働学習を取り入れた授業公開

１年国語
「わけをはなそう」
表情の理由を考えて、ペアで伝え合う。

３年算数
「計算のしかたをくふうしよう」
暗算を意識して簡単に求められる計算の仕方をグループで話し合う。

５年国語
「きいて、きいて、きいてみよう」
グループで聞き手、話し手、記録者の役割に分かれて、インタビューを行い、その内容を交流する。

研究協議から
・協働学習をどの場面でどのように取り入れれば、より効果的であるか考えつつ、授業形態や単元構成を考えることが大切である。
・今後、協働学習を進める上で、各学年の最終目標を定め、２年目教員同士がどのように協働して目的の達成に向けて取り組むかを考えていくようにしたい。

２年目教員の振り返り
「今のクラスの子どもたちの力や、協働学習を進めていく大まかな指針を知ることができたので、今後の取組に生かしたい。次回は子どもたちの成長をお知らせしたい。」

【2年目教員による協働的な授業づくり】
各学級の実態把握・前回の授業の反省・授業内容の検討・各学年での最終目標の相談、検討 など

センター研修Ⅰ（2回目　7月9日）

協働学習を取り入れた授業研究

１年学級活動
「いろいろなかおをかこう」
怒った顔や悲しい顔などを描いてペアで見せ合い、表し方の違いについて感想を伝え合う。

５年国語
「千年の釘にいどむ」
キーワードに気を付けながら、段落の要約文をグループで話し合って考える。

３年国語
「もうすぐ雨に」
好きな場面とその理由についてグループで考えを伝え合う。

研究協議から
- 前回の授業から内容や展開に工夫が見られ、子どもたちの集中度合いも高まっていた。
- 子どもたちの考えが深まるための指導や支援の在り方が難しい。
- 協働学習が成り立つ要素について考えつつ、授業づくりに取り組むことが大切である。

【2年目教員による協働的な授業づくり】　次回の研修内容の検討・公開授業の教科等の相談 など

センター研修Ⅰ（3回目　9月4日／4回目　10月7日）

センター研修Ⅱの授業公開に向けての研究協議

《第１学年の授業》
- 国語「もののなまえ」において「おみせやさんごっこ」をして会話を楽しみつつ、互いのよかったところなどについて伝え合う学習に取り組む。
- ペアでの協働学習をどのように組み込んで、どう支援すべきか、考えておく必要がある。
- 定まった話型だけでないやり取りが生まれれば、自分の思いを表現し合うことができると思われる。

《第３学年の授業》
- 算数「重さのたんいとはかり方」の学習で、重さを比べる方法をグループで考え合う活動に取り組む。
- 重さの順番を付けていくという共通の課題に取り組むことで、単なる伝え合いではなく、学び合いになると考える。
- 何をどう話し合うのか、約束事はどんなことか等のフレームワークを大切にしたい。

《第５学年の授業》
- 算数「面積の求め方を考えよう」で、既習の求積方法に帰着した考え方で、複合図形の面積の求め方を考え合う学習を展開する。
- グループ全員で取り組めるように、課題の設定や支援の在り方を事前に丁寧に検討しておきたい。
- どんな求積方法が工夫されたものとして挙げられるか、児童の思考を予め予想して対応できるようにしておきたい。

【2年目教員による協働的な授業づくり】
指導案の検討・教材の製作・プレ授業・2年目以外の所属学年の教員への相談、意見交流 など

センター研修Ⅱ（11月12日）

協働学習を取り入れた授業公開

1年国語「もののなまえ」
上位語と下位語の確認をした後、ペアになって売る時と買う時の言葉に注意してお店屋さんごっこをする。友達のよかった点を聞いた後、全体で行きたい店に行き、売り買いのやり取りを行う。

3年算数「重さのたんいとはかり方」
3つの品物の重さの順番が分かっている状態で、新たに1つ品物を加えて重さ順にするには、どんな順番で重さ比べをすればよいか、グループで考え合い、最後に全体で考えの交流を行う。

5年算数「面積の求め方を考えよう」
既習の図形を使って複合図形を作った後、グループのメンバーが同様にして作った図形の面積を求める。その後、グループの中でどの問題が一番難しいか話し合って決めて、他のグループに出題する。

他校の2年目教員を交えた研究協議と協働学習についてのグループ討議

研究協議
- ペアでのお店屋さんごっこの活動が充実していたことで生き生きと表現できていて良かった。
- 重さのランキングという明確な課題と丁寧な支援がグループ全員の主体的な学びにつながった。
- 互いの作った複合図形の問題にグループで意欲的に協働して解いている様子が見られ参考になった。

協働学習についてのグループ討議
- 課題内容、課題設定に際する工夫や配慮等が非常に大切となる。
- 研修を生かして、今後、積極的・意識的に協働学習に取り組みたい。
- グループサイズや構成、支援や助言の在り方なども考えていきたい。

奈良教育大学の先生の講義

- 進めてきた協働的な授業づくりを他校へ広げることが重要である。
- 互いのやり取りを通して社会性が身に付き、学校と生活との関連が深まっていく。ペア学習を基礎として今後も協働学習を進めて欲しい。
- 児童の学び、授業者の学び、受講者の学び、これらの3つの学びについて整理して考えるようにしたい。

ウ　成果

センター研修Ⅰ、Ⅱにおいて、授業実践を行った後に対象児童にアンケート調査を行っている。ここでは、２年目教員が共通した研究テーマに沿って協働学習を取り入れた授業づくりを協働的に進めることを通して、子どもたちの学びに深まりが見られたかどうかを検証することにより、２年目教員の授業力が向上したかという点に絞って取組の成果を見取りたい。（他の各地域センターの成果においても同様に見取ることとする。）

Ａ小学校では、３名の教員が３回ずつ授業実践を行った。以下に１回目から３回目のアンケート調査の結果を示す。（図１）

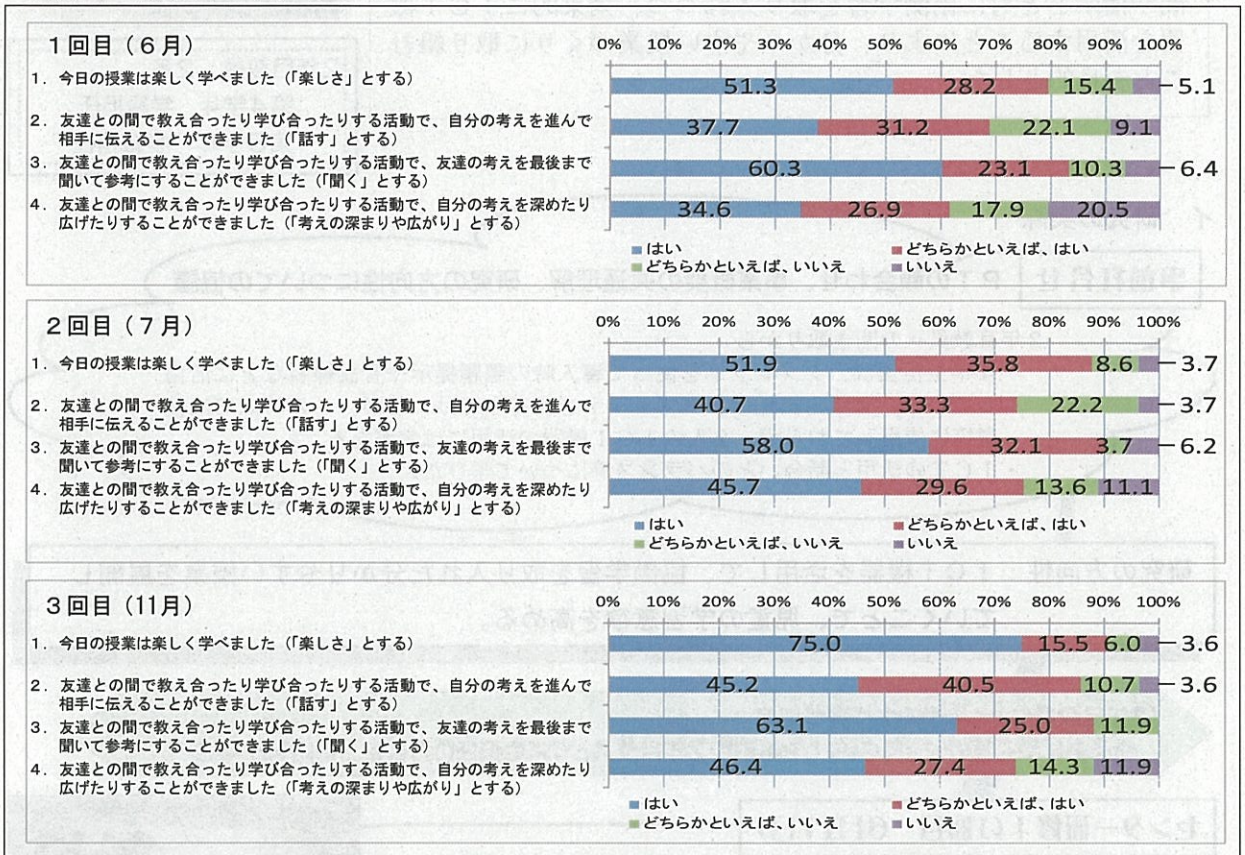


図１　１回目から３回目までのアンケート調査の結果

各質問項目において、最終の３回目には、肯定的な回答が１回目の数値よりも増加していることが分かる。特に、質問項目１「楽しさ」と質問項目４の「考えの深まりや広がり」で「はい」と答えた児童の割合は、それぞれ23.7ポイント、11.8ポイント上昇しており、他項目と比して高い上昇率となった。

また、１回目や２回目の調査で、「算数は好きじゃないから。」、「グループは嫌いだから。」、「別に楽しくない。」という感想をもった児童が、３回目の調査では、それぞれが「みんな教えたり、教えられたりしていろいろ楽しかった。」、「話合いが楽しい。」、「マグネットを作ったり、他の班の問題をしたりして楽しかった。」と記しており、個々に学びに対して意欲をもって取り組む姿勢が見られるようになってきた。

これらより、教員同士が協働学習を取り入れた授業づくりを進めてきたことで、児童が授業を楽しく感じ、協働学習に主体的に参加できていること、また、協働学習による学習内容の理解の深まりを児童自身が意識することができたと考える。以上のことから、北部Ａ小学校の２年目教員の協働的な授業づくりが、児童の協働学習を深化させ、授業力向上につながったと考える。

(2) 北部Ｂ小学校

ア　研究テーマ

ICT機器の活用による分かりやすい授業の展開

授業中に私語が多い児童や発言が少ない児童が存在し、全体的に学習課題に対する興味・関心が低い傾向にある。適切な発問や指示とともに協働学習を取り入れつつ、効果的にＩＣＴ機器を活用することにより、分かりやすい授業づくりに取り組むことを目的とした。

２年目教員　２名
第４学年　学級担任
第５学年　学級担任

イ　研究の実際

事前打合せ　ＰＴの顔合わせ、事業概要の共通理解、研究の方向性についての協議

２年目教員への聞き取りから
- ４年生担任は、タブレットを使って導入時の課題提示や音読練習などに活用している。５年生担任は、タブレットを所有してはいるが、この時点では授業等に使用しておらず、２人のＩＣＴ機器の活用には差がある。
- ＩＣＴの活用と話合いとのバランス等について学びたい。

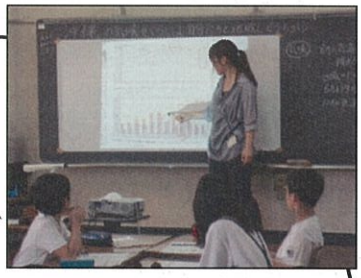
研究の方向性：ＩＣＴ機器を活用して、協働学習を取り入れた分かりやすい授業を展開していくことで、児童の学習意欲を高める。

【2年目教員による協働的な授業づくり】
電子黒板や書画カメラ等の使い方の相談・2年目教員と5年生担任の打合せ、模擬授業 など

センター研修Ⅰ(1回目　6月17日)

第５学年の協働学習を取り入れた授業研究

５年社会「日本の国土と人々のくらし」
那覇市と大阪市の気温と降水量のグラフを比較し、気付いたことや考えたことを伝え合う。



研究協議から
- 導入の段階で時間が足りなくなった部分を今後どう検討していくかが大切である。
- 最新のもの、リアルタイムのもの、見やすくなるもの等の資料がＩＣＴ機器による提示に適する。ＩＣＴ機器活用のメリットを明確にしていくこと。

２年目教員の振り返り
「周りにいてくれる同僚の先生の力を借りながら、一つの授業をつくり上げる大切さを知ることができた。忙しさに追われるだけでなく、自ら協働していく必要性を強く感じることができた。」

【2年目教員による協働的な授業づくり】　2年目教員と4年生担任による指導案の検討 など

センター研修Ⅰ（2回目　7月8日）

第４学年の協働学習を取り入れた授業研究

４年算数
「小数」
小数のたし算の仕方について、互いの考えを伝え合う。

研究協議から
- 前回の課題を踏まえ、導入部分のテンポが非常によかった。
- ＩＣＴ機器の活用を協働学習に結び付けていく部分に難しさを感じたが、児童が記した複雑な図表等のイメージをシェアしていくことが、その解決の糸口になる。
- 今後、シェアするにふさわしい課題の選択、提示の仕方、発問の在り方等について考えたい。

２年目教員の振り返り
「教員がＩＣＴ機器を活用して協働学習につなげていく可能性を見出すことができた。今後は、グループ間の考えのシェアの在り方も含めて、ＩＣＴの必要性を吟味しつつ、授業づくりに取り組みたい。」

【2年目教員による協働的な授業づくり】
これまでの研修の振り返り、2年目教員と5年生担任の打合せ、模擬授業　など

センター研修Ⅰ（3回目　9月8日）

第５学年の協働学習を取り入れた授業研究

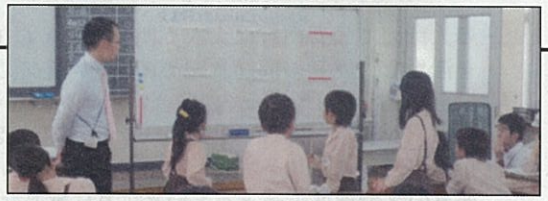
5年国語
「カンジー博士の暗号解読」
グループで同音の漢字を数種類組み込んだ暗号文を考えて伝え合う。

研究協議から
- ＩＣＴ機器の操作がスムーズになってきた。
- 資料の提示の仕方に工夫が見られた。
- 例えばワークシートを提示するならマス目を大きくしておくなど、目的に応じて授業の中で有効に活用できるような資料づくりも大切である。

【2年目教員による協働的な授業づくり】　2年目教員と4年生担任による指導案の検討　など

センター研修Ⅰ（4回目　10月14日）

第４学年の協働学習を取り入れた授業研究



４年生社会
「安全なくらしを守る」
安全に過ごすために気を付けたいことについて話し合う。

研究協議から
- スムーズな機器の操作で、ストレス無く活動が進んだ。
- 画像と動画の違いについて、より臨場感をもたせる工夫について等も、今後の授業づくりの課題としたい。
- 児童の立場からの見え方を考える視点が必要である。

センター研修Ⅱの授業公開に向けての研究協議

- ４年算数「面積の求め方の工夫」、５年社会「これからの食料生産」の指導案について検討を行った。

【2年目教員による協働的な授業づくり】
指導案の検討・2年目以外の所属学年の教員への相談・互いの模擬授業、意見交流　など

センター研修Ⅱ（11月20日）

協働学習を取り入れた授業公開

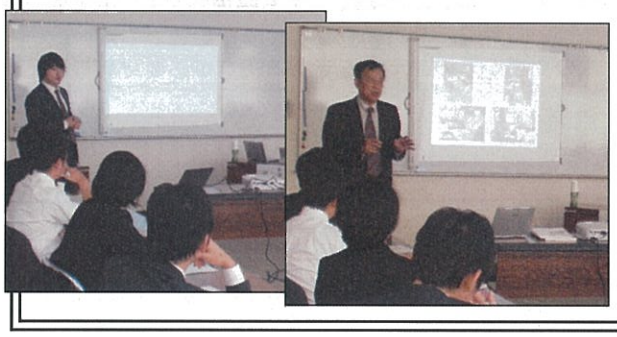
５年社会「これからの食料生産」
レモンや大豆などの食料品について、国産と外国産のどちらを選ぶか、その理由も含めて考えて、グループで意見交流をする。その後、全体に発表して国産と外国産の特徴について話し合う。

４年算数
「面積の求め方の工夫」
長方形や正方形の求積方法を利用して、複合図形の面積の求め方を個人で考える活動に取り組む。その後、ペアで互いの考えを伝え合い、全体で発表交流を行う。最後に２つの方法を選んで実際に面積を求める。

他校の２年目教員を交えた研究協議

- 導入段階で学習内容に大きく関わってＩＣＴ機器を活用し、児童の問題意識や興味を高めることができた。だからこそ、後の話合いが活発になった。
- 効果的な提示と学びの共有化という研究の２つの視点が授業の中にきちんと取り入れられていて、児童の学習意欲が高まっていたように感じた。

奈良教育大学の先生の講義



- 本研修において２人の先生方は、意識改革からリテラシー向上、学習内容を踏まえた工夫あるＩＣＴ機器の活用と、段階を経て力を付けてこられた。
- ＩＣＴを活用する際に最も大切なことは、目的意識をもつことである。
- ＩＣＴはただ活用すれば、教育効果が上がるというものではなく、使用するタイミングや方法など、教員の創意工夫された指導の中に組み込むことが大事である。

ウ　成果

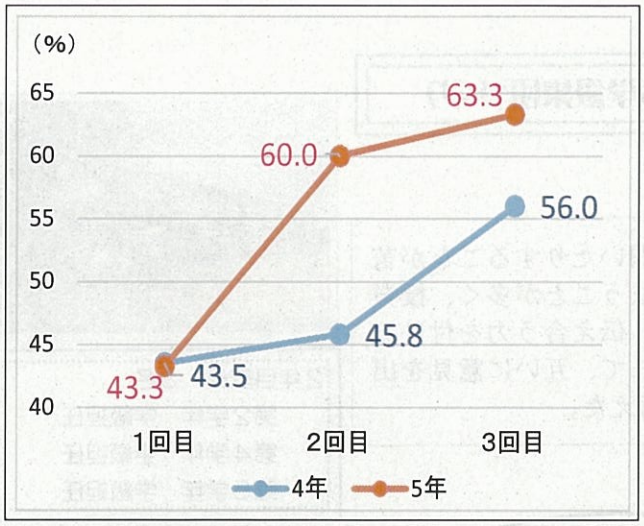


図１　「今日の学習は楽しく学べました」という質問項目に対して「はい」と回答した割合

Ｂ小学校では、２名の教員が３回ずつ授業実践を行った。アンケート調査の「今日の学習は楽しく学べました」という質問項目に対して「はい」と回答した児童の割合は、どちらの学級においても回を経るごとに上昇した。（図１参照）

楽しく学べた理由として、１回目は「沖縄が好きだから。」、「問題が簡単だったから。」、「図をかくのが好きだから。」というような学習内容の嗜好（しこう）による理由を挙げていた者が目立ったが、３回目は「映像が映るので分かりやすかったから。」、「いろんな人の意見が見られたから。」、「意見を聞いたり発表したりしてみんなで意見を言い合えたから。」というような授業の在り方に関わる理由を挙げている児童が多くいた。

また、協働学習に関わる３つの質問項目について、１回目（４年生は７月実施、５年生は６月実施）と３回目（11月実施）の授業実践後の項目それぞれの相関関係を調べて比したものが表１である。表１から、質問項目１「話す」と質問項目３「考えの深まりや広がり」、質問項目２「聞く」と質問項目３「考えの深まりや広がり」との相関が強まっていることが分かる。これは、継続的に取組を進めてきたことにより、自分の考えを進んで伝えたり、友達の考えを最後まで丁寧に聞いたりする活動が充実することと、自分の考えが深まったり広がったりすることの関係性が強まったといえる。

表1　協働学習に関わる質問項目別の1回目と3回目の基礎統計量の比較、相関関係の比較

質問項目 (各回答を、「はい」を4、「どちらかといえば、はい」を3、「どちらかといえば、いいえ」を2、「いいえ」を1として数値化している)	N	平均値	標準偏差	質問項目1	質問項目2	質問項目3
1. 友だちとの間で教え合ったり学び合ったりする活動で、自分の考えを進んで相手に伝えることができました(「話す」とする)	54	2.94	0.88	－		
	55	3.13	0.72	－		
2. 友だちとの間で教え合ったり学び合ったりする活動で、友だちの考えを最後まで聞いて、参考にすることができました(「聞く」とする)	53	3.09	0.84	.450 **	－	
	55	3.27	0.87	.327 *	－	
3. 友だちとの間で教え合ったり学び合ったりする活動で、自分の考えを深めたり広げたりすることができました(「考えの深まりや広がり」とする)	54	2.76	0.89	.418 **	.347 *	－
	55	2.85	0.91	.564 ***	.448 ***	－

上段:1回目(6・7月)／下段:3回目(11月)　　***p<0.001　**p<0.01　*p<0.05　†p<0.1

これらのことから、ＩＣＴ機器を活用して協働的な学びを意識した授業を継続的に進めてきたことにより、学習内容が分かりやすくなったり、多様な考えが得られるようになったりして、児童の学ぶ意欲が高まったと考えられる。また、継続的に協働学習を進めることで、主体的に自らの考えを伝えたり、友達の考えを最後まで聞いたりすることが、自らの考えを深めたり広げたりすることにつながっていくということも示唆された。以上のことから、Ｂ小学校の２年目教員の協働的な授業づくりが、児童の協働学習の深まりを生み出し、授業力向上につながったと考える。

(3) 中部Ｃ小学校

ア　研究テーマ

自分の思いを伝え合い、学び合える学級集団づくり

自分の意見を伝えたり、友達の意見を聞いたりすることが苦手である。また、人の意見に流されてしまうことが多く、授業においても特定の児童からの発表が多い。伝え合う力を付けることができるような授業づくりを目的として、互いに意見を出し合い、深め合える学級集団にしたいと考えた。

２年目教員　３名
第２学年　学級担任
第４学年　学級担任
第５学年　学級担任

イ　研究の実際

事前打合せ　ＰＴの顔合わせ、事業概要の共通理解、研究の方向性についての協議

２年目教員への聞き取りから
- 全体的に話合いが活発にならない。
- グループ活動に取り組めない児童がいたり、自分の思うように進める児童がいたりして、友達間、男女間のつながりが浅いように感じる。
- 効果的な協働学習の取り入れ方について学びたい。

研究の方向性：人間関係づくりを進めつつ、授業の中で共に学び合えるような取組を展開することで、学級集団を高めていく。

センター研修Ⅰ（1回目　6月2日）

今後の取組の進め方や授業づくりの方向付けを行うための協働学習を取り入れた授業公開

４年国語
「新聞をつくろう」
グループで新聞の割付等の相談をする。

５年国語
「生き物は円柱形」
文章をまとまりごとに分ける相談をする。

２年図画工作「ねんどで作ろうおべんとう」
友達の作ったお弁当を見た感想を伝え合う。

研究協議から
- ねらいや実態に応じて話し合う内容や形態等を吟味していくことを大切にしていく。
- グループ活動等において、フレームワークやルールづくりを浸透させていくようにする。
- 様々な課題をもたされている児童に個別に対応していくうえで、受容、傾聴、繰り返しを意識するように心がける

【2年目教員による協働的な授業づくり】
授業内容の検討・隙間時間の井戸端会議的な打合せ・付箋を使った助言、励まし など

センター研修Ⅰ(2回目　7月2日)

２年国語
「スイミー」
自分の好きな場面について理由を明確にして伝え合う。

第５学年の協働学習を取り入れた授業研究
（授業の記録映像を視聴した後に協議を行う）

研究協議から
- 学級集団みんなで学びに向かう意識を高めるように学習規律を見直したことがよかった。
- グループ活動の際に、個々の児童に対する支援に留意できていた。
- 協働学習に向かうまでの学びへの意欲を高める工夫が随所に見られた。
- 協働学習を取り入れる際に、聞き手の観点を明確にしたワークシートの在り方や活動に応じたグループサイズの設定などについて、今後工夫していきたい。

２年目教員の振り返り
「自分一人で学級を進めていく中で、自信がないこともあるので、同期の先生から吸収させてもらえたり、大丈夫と背中を押してもらえたりすることはとてもうれしいことで、頑張ってよかった。」

【2年目教員による協働的な授業づくり】　授業内容、進度の確認 など

センター研修Ⅰ(3回目　9月4日／4回目　10月7日)

センター研修Ⅱの授業公開に向けての研究協議

《第２学年の授業》
- 国語「お手紙」において、音読の仕方について互いの考えを深め合う学習に取り組む。
- 叙述や挿絵から読みを考えるようにして、それを交流できればよいので、音読劇という形がふさわしいと考える。
- 窓枠や登場人物のお面、ワークシートなどで児童の想像を膨らませる工夫を凝らして、読みに対する多様な意見を引き出したい。

《第４学年の授業》
- 体育「プレルボール（ネット型ボールゲーム）」に取り組み、ボールをうまくつなぐための作戦を話し合うような学習を展開する。
- ルールや人数編制、ジャッジなどをどうするかというフレームワークが大切になってくる。
- なるべく運動の時間を増やしたいが、チームの中で作戦について様々に話し合う時間も確保したい。

《第５学年の授業》
- 算数「図形の面積」において、台形の面積の求め方を考え合う学習に取り組む。
- 分からない人に教えるだけではなく、互いの学び合いがあることが大切なので、そのための支援を考えておきたい。
- どのような求め方がいくつ出るか、予め想定して対応したい。

【2年目教員による協働的な授業づくり】
指導案の検討・2年目以外の所属学年の教員への相談・互いのプレ授業の参観、意見交流 など

センター研修Ⅱ（11月6日）

協働学習を取り入れた授業公開

２年国語「お手紙」
かえるくんががまくんに手紙を書いたことを伝えた場面の互いの気持ちを言葉や行動から感じ取り、どのように読むかペアで相談して音読劇の練習をする。その後、音読劇を発表して、それを聞いてどんな気持ちが伝わってきたか、伝え合う学びを行う。

４年体育「プレルボール（ネット型ゲーム）」
チームごとに自分たちで準備を進め、体操を行った後、集合してめあての確認を行う。その後、チームで作戦を話し合い、ゲームを開始する。合間の作戦タイムでは、担任教員の助言をもとに、ホワイトボードやマグネットを使って、どうすればボールがうまくつながるか、得点に結び付くか、自分の考えを伝え合う。

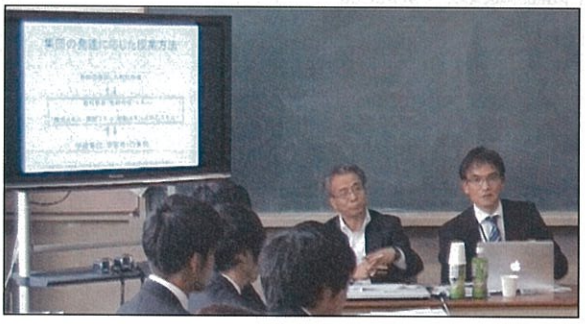
５年算数「図形の面積」
既習図形の求積方法に帰着した考え方で、台形の求め方を個人で考える活動に取り組む。その後、グループで互いの考えを伝え合い、自分たちが紹介したい求め方を話し合って選び、全体で発表交流を行う。

他校の２年目教員を交えた研究協議

・落ち着いた学習態度が印象的で、２年生のこれまでの学びの積み重ねを感じることができた。
・準備や体操など、子どもたちが自主的、主体的に活動に取り組んでいてすごいなと思った。
・グループで求積方法を伝え合う中で、子どもたちへのきめ細やかな支援がよく行き届いていた。

奈良教育大学の先生の講義

・教育実践の前提となる集団づくり、中でも特に、ルールやリレーションの形成が大切である。
・集団の対立やもめ事の解決を通して関わりを深めていくことが大事である。
・Ｃ小学校の２年目教員は、学級集団の実態に合わせて協働学習を取り入れ、適切な集団対応と個別対応で支援ができていた。



ウ　成果

Ｃ小学校の２年目教員が行った授業実践において児童対象にアンケート調査を実施した。そのうちの協働学習に関わる質問項目について、６月と11月の授業実践後の基礎統計量を比較したものが表１である。６月に比べて11月の各質問項目の値の平均は、全て上昇している。特に、協働学習の機会が普段から保障されていること、協働学習が学習内容の理解に結び付いていることへの意識が高まっていることが分かる。

表１　協働学習に関わる質問項目別の６月・11月の基礎統計量の比較

質問項目 （各回答を、「はい」を4、「どちらかといえば、はい」を3、「どちらかといえば、いいえ」を2、「いいえ」を1として数値化している）	N	6月の授業実践後 平均値	6月の授業実践後 標準偏差	11月の授業実践後 平均値	11月の授業実践後 標準偏差	t値
学級では、授業中に全体でもグループでも、自分たちの考えをどんどん発表しています	91	3.30	0.76	3.51	0.75	1.918 †
学級では、授業中に全体でもグループでも、友だちの考えを最後までよく聞いています	91	3.42	0.73	3.53	0.75	1.342
学級では、授業中に全体でもグループでも、ふだんからよく教え合ったり学び合ったりしています	91	3.18	0.88	3.45	0.75	2.648 **
友だちとの間で教え合ったり学び合ったりする活動は、楽しいです	89	3.53	0.75	3.54	0.85	0.109
友だちとの間で教え合ったり学び合ったりする活動は、学習内容がよく分かります	90	3.32	0.84	3.58	0.70	2.539 **

***p<0.001　**p<0.01　*p<0.05　†p<0.1

また、同調査において、協働学習のよさについて自由記述した内容をテキストマイニングの手法で分析した６月と11月の結果を比較したものが図１である。６月では、「友達」、「教える」、「分かる」の共起関係の広がりが見られなかったが、11月では、「自分」や「意見」、「思う」、「深まる」などとの共起も見られ、協働学習のよさについて、自分と友達の考えを関わらせて多様に表現していることが分かる。

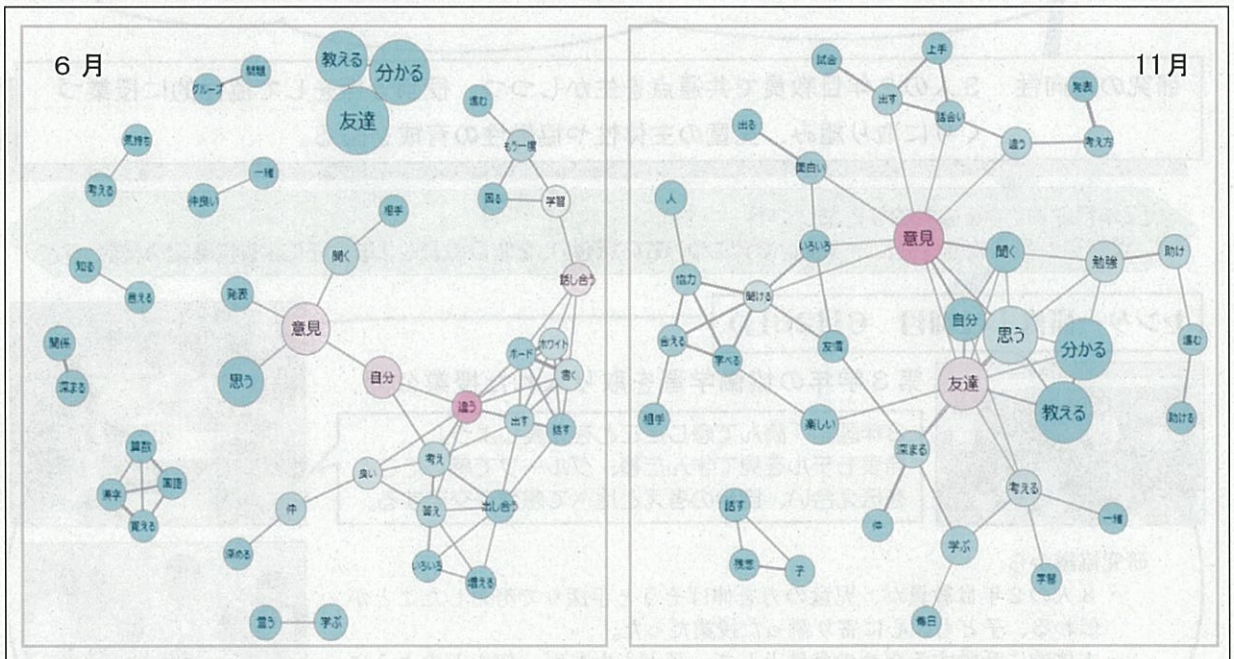


図１　協働学習のよさについて自由記述した内容の６月と11月の共起関係の比較

これらより、教員同士が協働学習を取り入れた授業づくりを進めてきたことで、協働学習の機会が普段から取り入れられていること、協働学習によって学習内容の理解が深まることを児童自身が意識することができたと考える。また、協働的に学ぶことに対して、意見の多様性や考えの深まりも認識できてきたといえる。以上のことから、Ｃ小学校の２年目教員の協働的な授業づくりが、児童の協働学習の深まりを生み出し、授業力向上につながったと考える。

(4) 中部Ｄ小学校

ア　研究テーマ

主体的に仲間と共に取り組み
学び合える子の育成を目指して

第１学年　学級担任
第３学年　学級担任
第５学年　学級担任

児童の実態として、周りの人に興味や関心が低く、自ら主体的に関わっていくような姿勢や集団意識が乏しいことが挙げられる。そこで、問題解決学習やアクティブ・ラーニングを取り入れ、児童が主体的に考え、思考を活性化させるような授業の構築を目的とした。

イ　研究の実際

事前打合せ　ＰＴの顔合わせ、事業概要の共通理解、研究の方向性についての協議

２年目教員への聞き取りから
- 児童自らが興味をもって、主体的に学びに関わるようにしたい。
- 周りの人や物、事に興味・関心をもち、集団意識を高めていきたい。
- 学校の研究主題と合わせている。学年は違うが３人で協働して授業をつくり上げ、そこで生まれた「気付き」を蓄積しつつ取組に励みたい。

研究の方向性：３人の２年目教員で共通点を生かしつつ、役割分担をして協働的に授業づくりに取り組み、児童の主体性や協働性の育成を図る。

【2年目教員による協働的な授業づくり】
2年目教員と教務主任による協働学習についての話合い、2年目教員と3年主任による指導案の検討　など

センター研修Ⅰ（1回目　6月26日）

第３学年の協働学習を取り入れた授業公開

３年国語「読んで感じたことを発表しよう」
発表モデルを見て学んだ後、グループで感じたことを伝え合い、自分の考えと比べて感想を交流する。

研究協議から
- ３人の２年目教員が、児童の力を伸ばそうと手探りで努力したことが伝わる、子どもの心に寄り添った授業だった。
- 主体的に活動するための条件として、子どもたちが、何をどのように活動すべきか理解していることが必要条件となる。
- 協働学習に向かうために焦点化した発問、授業づくりを心がけたい。

２年目教員の振り返り
「３人で一緒に考え、以前より確実に同僚理解は深まった。先輩の先生方に学ぶ時間もあり、応援の声かけもいただき、人の温かさを感じる研修となった。」

【2年目教員による協働的な授業づくり】
2年目教員と教務主任、5年担任による指導案の検討・学び合いの授業（算数）の実施　など

センター研修Ⅰ（2回目　7月7日）

第５学年の協働学習を取り入れた授業研究

５年算数
「小数で割る計算の仕方を考えよう」
既習の割り算のきまりを参考にして、96÷２の計算の仕方について考え、他の児童に説明をする。

研究協議から
- 自分の言葉で他の児童に計算の仕方を説明することで、アウトプットしつつインプットすることができ、学びを深めることができた。
- 自分が考えた計算の仕方の説明をただ伝えるだけにならないように、学び合いとして課題設定、活動内容等の在り方を工夫することが大切である。

【2年目教員による協働的な授業づくり】
学び合いの在り方についての話合い・指導案の検討・2年目教員と1年生担任による教材準備 など

センター研修Ⅰ（3回目　9月17日）

第１学年の協働学習を取り入れた授業研究

１年生活「ザリガニのすみかをつくろう」
設計図に基づいて、ザリガニのすみかをグループで相談しながら作り、工夫したところについて発表交流する。

研究協議から
- 「ザリガニ先生」の存在により、学習意欲の向上、学びの深まりが見られ、授業の中での２年目教員の協働体制がとてもよく取れていた。
- 友達と意見交流することにより、「隠れる場所が暗いからいい。」というように気付きの質を高めることができたと感じた。

２年目教員の振り返り
「Webサイトを見た他校同期から励ましの言葉をもらったり、実際に夏休み中に授業について相談したりできた。３人で話す会話の内容が精神的なものから、授業や指導法などに変容してきている。」

【2年目教員による協働的な授業づくり】　授業内容、進度の確認 など

センター研修Ⅰ（4回目　10月15日）

センター研修Ⅱの授業公開に向けての研究協議

《第１学年の授業》
- 国語「ことばを見つけよう」で、中に隠れている言葉が多い言葉を相談して決める学習を展開する。
- グループで話し合う際に、児童が互いの意見を認め合うための指導や支援の工夫が必要になる。

《第３学年の授業》
- 理科「電気で明かりをつけよう」で、どんな物が電気を通すか、予想し合い確かめる学びに取り組む。
- 児童の追究意欲を醸成したり、児童が円滑に活動したりするために、教材や教具の工夫を考えたい。

《第５学年の授業》
- 算数「単位量あたりの大きさ」で、混み具合を調べる方法を考えて、互いに伝え合う学習を展開する。
- 正解を求めるためではなく、なぜそうなるのかを解決するために話し合って協働できるようにしたい。

【2年目教員による協働的な授業づくり】
指導案の検討・2年目以外の所属学年の教員への相談・教材の作成、意見交流 など

センター研修Ⅱ（11月27日）

協働学習を取り入れた授業公開

１年国語「ことばを見つけよう」「いる」と「ある」の使い分けの練習をした後、別の言葉が隠れた言葉を考えて、グループで伝え合う。その後、紹介したい言葉をグループで相談して決めて、全体で発表交流する。

宮司先生が問題を出すよ。みんな答えられるかな？「大谷先生は…」「いる」と「ある」、どっちかな？

いる！！

この言葉にしよう！

「見つけよう」の中には、「みつ」がある。

はなれた導線の間に何をはさむと明かりがつくかな？予想して確かめてみよう。

廊下に置いてあるこの棚を間にはさむとつくかな…？

同じ物でもついた物と、つかなかった物があるよ。どうしてかな？

３年理科「電気で明かりをつけよう」
どんなものが電気を通すのか予想する。その後、教室内外にて、実験でそれらの予想が正しかったかどうかを確かめる。そして、グループごとに気付いたことを話し合いつつ、結果をまとめて画用紙に整理した後、全体に紹介する。

５年算数「単位量あたりの大きさ」
ひよこの数も面積も違う場合の混み具合を比べる方法を２通り以上考える。自由に教室内を動き回り、互いの考えを伝え合って学び合い、協力して解決を目指す。その後、とんな比べ方を考えたか、学級全体に発表して交流する。

この考え方でも混み具合は調べられるね。

友達と協力して、比べ方を何通りか考え合うことができていました。よく頑張りましたね。

そうか、なるほど。

両方の面積を最小公倍数の６㎡に合わせて、ひよこの数で比べました。

他校の２年目教員を交えた研究協議

- どの言葉にするのか、グループで決める際に、折り合いを付けながら話合いができる児童の姿に驚いた。学習内容をよく理解していたと思う。
- 導入の掲示物や教具の工夫、教室外に出てよい自由度等、児童が自然事象に自ら関心をもって関わろうとする環境づくりがとてもよかった。
- 算数の授業において、主体的に学び合いができる学級の雰囲気のよさが感じられた。担任教員の常に新しい方法を模索する姿勢が素晴らしく感じた。

奈良教育大学の先生の講義

- 教員自身が学び続けることで、ライフステージに合わせたキャリア発達を遂げていく必要性がある。
- 時代の変化に合わせて「何を学ぶか」という知識の質や量だけでなく、「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視することが今後、大切になってくる。
- 時代のニーズに応じて教員の基礎授業力も変容していくので丁寧に見直す必要がある。（２年目教員同士が議論した中では、「学んだことを生活につなげる力」、「子どものよさを共有して広める力」などが意見として挙がっていた。）

ウ　成果

Ｄ小学校の３名の２年目教員が行ったセンター研修における授業実践の初回と最終回での児童に対するアンケート調査の結果が図１である。各質問項目とも初回に比べて最終回の11月の段階では、肯定的な回答の割合が増加していることが分かる。特に、質問項目２「楽しさ」で「はい」と答えた児童の割合は、24.8ポイント上昇しており、他項目と比して高い結果となっている。

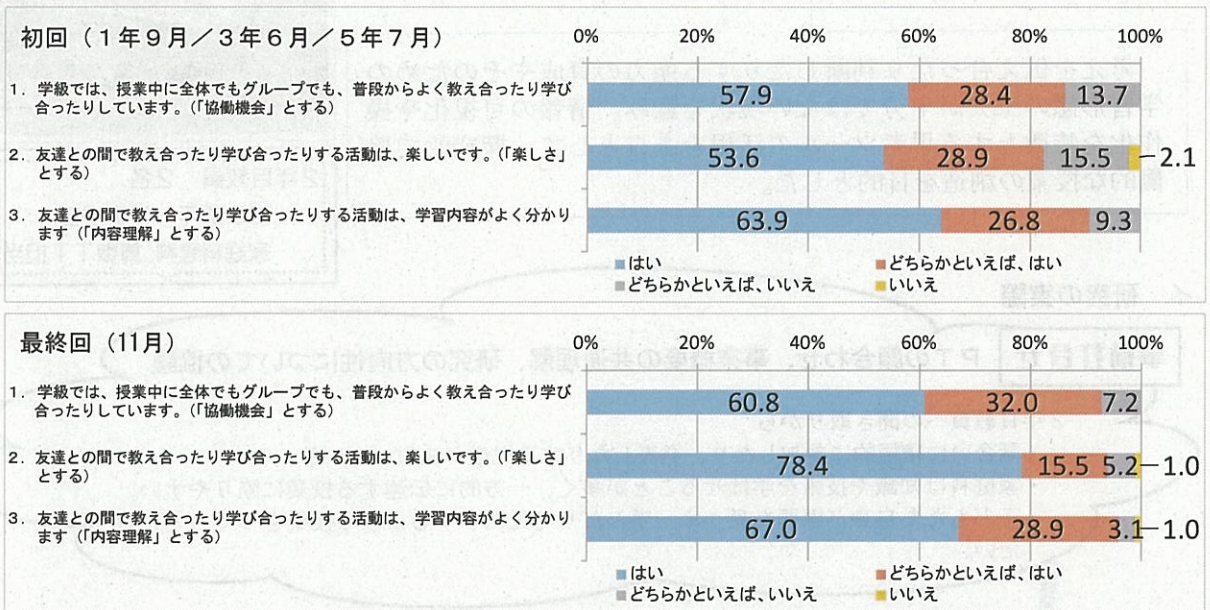


図１　初回と最終回のアンケート調査の結果

また、同調査において、協働学習のよさについて自由記述した初回と最終回の内容を比較したものが表１である（一部の抽出児童のみ）。初回では、自分自身の理解についてのみ述べている児童が目立つが、比して最終回では、意見の違いから生まれる新しい考えなどの思考の広がりや深まりについて具体的に言及していることが見て取れる。

表1　協働学習のよさについて自由記述した初回と最終回の内容の比較（一部の抽出児童）

友だちとの間で教え合ったり学び合ったりする活動のよさを自由に書きましょう

児童	初　回	最　終　回
A児	4人の方が1人より楽しいです。	みんなと話すのはいいと思います。みんなと意見が違うからみんなが勉強になると思います。
B児	この活動は、グループになってより自分の意見を出し合えていいと思う。	友達とたくさん意見を言うことでその勉強の意味も分かり合えるから、学習を広げられると思います。
C児	自分と友達ですると、分かりやすくなるからです	私は人それぞれ考え方が違うので自分が分からなかったことや思ったことが言い合えていいと思います。
D児	4人グループになっているから。	友達が違うことをしてたり書いてたりして発表してもらったら勉強になるから。
E児	分からなかったことが分かったり、知らないことが分かるようになるから。	自分の考えだけじゃなく友達の意見や考えも聞けるのでそこがいいと思いました。
F児	友達の考えを自分に取り入れられるところがいいと思った。	新しい考えが出る。友達との絆が深まる。
G児	教えた人も教えられた人も、みんなが理解できるすごく大切なことだと思いました。	自分の考えた求め方以上に他の求め方が見つけられるところ。
H児	友達に説明することで、自分も理解力がアップできるところがいいと思う。	自分の視野を広げられるからいいと思います。友達と教え合えば自分のやりやすいやり方が見つかるからいいと思う。
I児	自分の分からないところも、友達と教え合えば分かる。	自分が考えていなかったことも、友達と話し合えばいろんな意見が出ていい。授業がより楽しくなる。
J児	教え合うと自分の考えもよくなる。	考えが深まったり、自分の考えがより説明できるようになったりするからいいと思う。

これらより、教員同士が協働学習を取り入れた授業づくりを進めてきたことで、協働学習の機会が普段から設けられてきたこと、また、仲間と主体的に関わり楽しく学ぶ意欲が高まってきたことがうかがえる。さらに、協働的な学びが思考の活性化を生み出すことに児童自身が自覚し始めていることも示唆された。以上のことから、Ｄ小学校の２年目教員の協働的な授業づくりが、児童の協働学習の深まりを生み出し、授業力向上につながったと考える。

(5) 南部Ｅ小学校

ア　研究テーマ

思考ツールを活用した探究的で協働的な授業の創造

考えを伝え合ったり判断したりする能力の育成やそのための学習形態の工夫が十分ではない現状を鑑み、情報の可視化や操作化を特徴とする思考ツールの活用を糸口として、探究的で協働的な授業の創造を目的とした。

２年目教員　２名
第３学年　学級担任
家庭科専科、算数ＴＴ担当

イ　研究の実際

事前打合せ　ＰＴの顔合わせ、事業概要の共通理解、研究の方向性についての協議

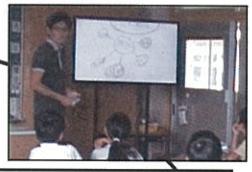
２年目教員への聞き取りから
- 話合いに積極的に参加したり、発表したりする児童が決まっている。
- 家庭科は知識や技術を学ばせることが多く、一方的に伝達する授業に陥りやすい。
- 子どもたち自身が課題を見つめ、学んだり考えたりするような授業をつくっていきたい。

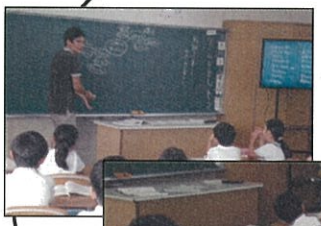
研究の方向性：思考ツールを使った探究的、協働的な学びを研究しつつ、児童の主体的・協働的な学びをつくり上げていく中で、学習意欲を高めることを目指す。

【2年目教員による協働的な授業づくり】
2年目教員と学校長による単元や授業に有効な思考ツールの検討、授業の方向性の確認　など

センター研修Ⅰ（1回目　6月23日）

今後の取組の進め方や授業づくりの方向付けを行うための第３学年の協働学習を取り入れた授業公開





３年国語「調べて書こう、わたしのレポート」
イメージを膨らますのに有効な思考ツール「イメージマップ」を使って、自分の調べてみたいことを考え、その内容について友達と伝え合う。

研究協議から
- 思考ツールは、単元や本時の目標を達成するためのツールであり、使うことが目的になってはいけない。
- 適切な思考ツールを適切な方法、時間に用いることが大切である。
- ペアで話し合う際の視点を明確に視覚化、焦点化することができるＩＣＴ機器も有効な学びのツールとなっていた。

２年目教員の振り返り
「昨年度は、同期の教員同士であっても、今回のような相談や協議を行う機会がなかったので、とても勉強になっている。互いに話をしていくうちに考えが集約されていくのが実感できた。」

【2年目教員による協働的な授業づくり】
2年目教員と学校長による単元や授業に有効な思考ツールの検討、本時についての打合せ　など

センター研修Ⅰ（2回目　7月14日）

第５学年の協働学習を取り入れた授業研究
（授業の記録映像を視聴した後に協議を行う）

５年家庭「整理整頓の計画を立てよう」
順序立てて考える時に役立つ思考ツール「ステップチャート」を使って、整理整頓の仕方をグループで話し合って決める。

研究協議から
- 目標を見据えて思考ツールを取り入れると同時に、どう評価すべきか考えておくことも重要である。
- 「ステップチャート」には、一度考えた順序や計画を加除・修正できるという特徴があるが、それをもっと活用すると互いの考えの交流が深まったのではないかと思われる。
- 今後、授業に合わせて、既成の思考ツール以外にもオリジナルなものを考えることも大切である。

【2年目教員による協働的な授業づくり】
2年目教員と学校長による単元や授業に有効な思考ツールの検討、本時についての打合せ　など

センター研修Ⅰ（3回目　10月20日）

第３学年の協働学習を取り入れた授業研究

３年社会「店ではたらく人々の仕事」
根拠を関連付ける思考ツール「くらげチャート」を使い、スーパーマーケットの様々な工夫について発表交流した後、一番の工夫について話し合う。

研究協議から
- 前時までにおいて、思考ツールを使って根拠を示しながら店の工夫を具体的に考えることができ、意欲的に学ぶ姿勢が見られた。
- 思考ツールの特徴や用い方を児童に十分認識させることが大切である。

【2年目教員による協働的な授業づくり】　指導案、思考ツールの検討・進度の確認　など

センター研修Ⅰ（4回目　11月24日）

センター研修Ⅱの授業公開に向けての研究協議

《第３学年の授業》
- 理科「電気で明かりをつけよう」で、どんな物が電気を通すか、予想し合い確かめる学習を展開する。
- 予想したり結果を表したりするのに適した思考ツールを取り入れて話し合う活動を充実させる。

《第５学年の授業》
- 家庭「食べて元気に」で、不足している栄養グループを補うための献立を考え合う学習に取り組む。
- グループで考え合った献立の品目を相談して決めていく時に有効な思考ツールを取り入れる。

【2年目教員による協働的な授業づくり】
2年目教員と学校長による指導案の検討・教具等準備物の確認・互いの模擬授業、意見交流　など

センター研修Ⅱ（12月3日）

協働学習を取り入れた授業公開

３年理科「電気で明かりをつけよう」
グループで予想したり結果を表したりする際に有効な思考ツール「発表ボード」を使って、どんなものが電気を通すのか、話し合って予想する。実験でそれらの予想が正しかったかどうかを確かめ、発表交流する。その後、どんな物が電気を通したのか振り返り、気付いたことを伝え合う。

他校の２年目教員を交えた研究協議

５年家庭「食べて元気に」
食品を３つの栄養グループに分け、足りないグループを補うためにどのような献立を加えればよいかを考える。その後、よりふさわしい物を選択する際に役立つ思考ツール「ピックアップツール」を活用し、話し合って決めた献立の品目を全体に発表交流し、互いの工夫について学び合う。

- 理科の授業で予想を確かめる際に、児童がとても意欲的で、主体的に学んでいたことが印象的だった。
- 児童の思考を明確にするために、一目見て共有できるツール（発表ボード）を準備していたことがよく分かり大変参考になった。
- 児童が主体的に献立を考える話合いに参加できていたのは、先生が常に笑顔で、安心して学べる授業の雰囲気が大きかったと感じた。
- ピックアップするためのワークシートが、児童の思考の流れに沿う形でとても丁寧に作られていたので、大変有効であった。

奈良教育大学の先生の講義

- 「なりたい自分」をデザインするために、教員自身が自分を振り返ることができるような評価の規準をもつことが今後大切となる。
- 教員として成長過程を設計するために、ゴールを設定したり、能力を明確にしたり、ルーブリックを構成して段階付けた規準を設けたり、振り返りを丁寧に蓄積したりしていくことをこれからも意識したい。
- 視点が明確な評価表を実際に用いて、互いに評価し合うことが学びを高め合うことにつながる。

ウ　成果

Ｅ小学校の２名の２年目教員が行ったセンター研修における授業実践の初回と最終回での児童に対するアンケート調査の結果（図１）を見ると、最終回での肯定的な回答の割合は、全ての質問項目において、初回と比べて増加していることが分かる。特に、質問項目１「楽しさ」、質問項目３「聞く」で「はい」と答えた児童の割合は、それぞれ32.5ポイント、28.0ポイント上昇し

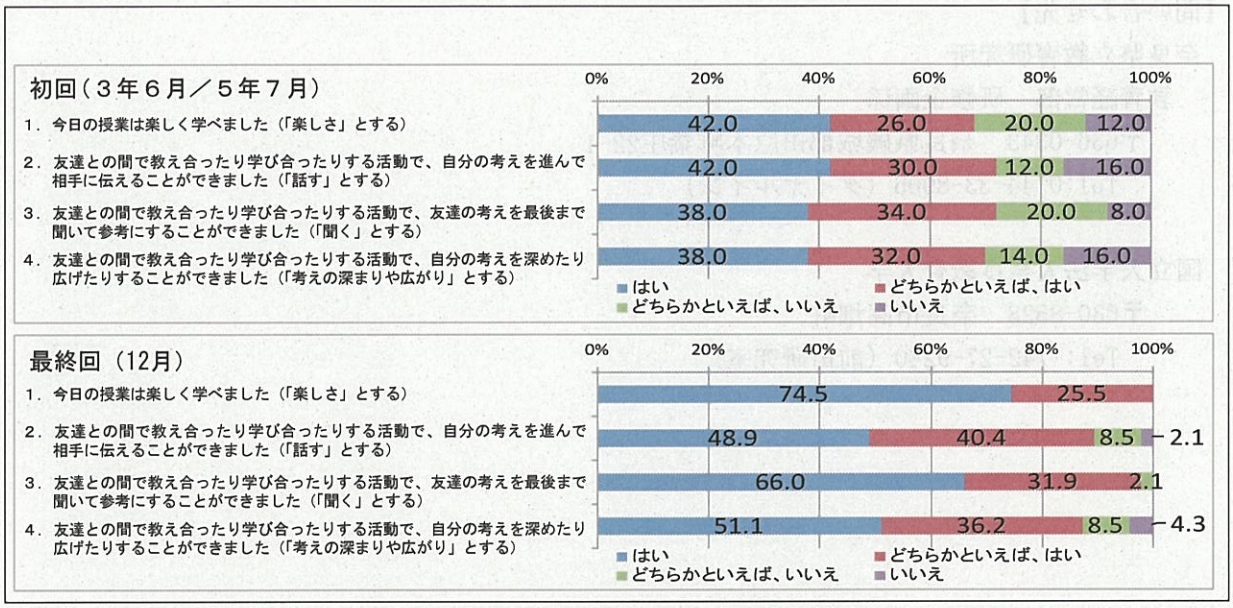


図１　初回と最終回のアンケート調査の結果

また、同調査において、質問項目１の回答理由を自由記述した内容について、テキストマイニングの手法で初回と最終回を分析した結果を比較したものが図２である。初回では、共起関係のある語句そのものが少なく、「楽しい」という言葉との共起関係の広がりが見られなかったが、最終回では、「話合い」、「意見」、「考える」、「協力」などの語句と多岐にわたって共起が見られ、楽しかった理由を協働学習に関連する語句で表現していることが分かる。

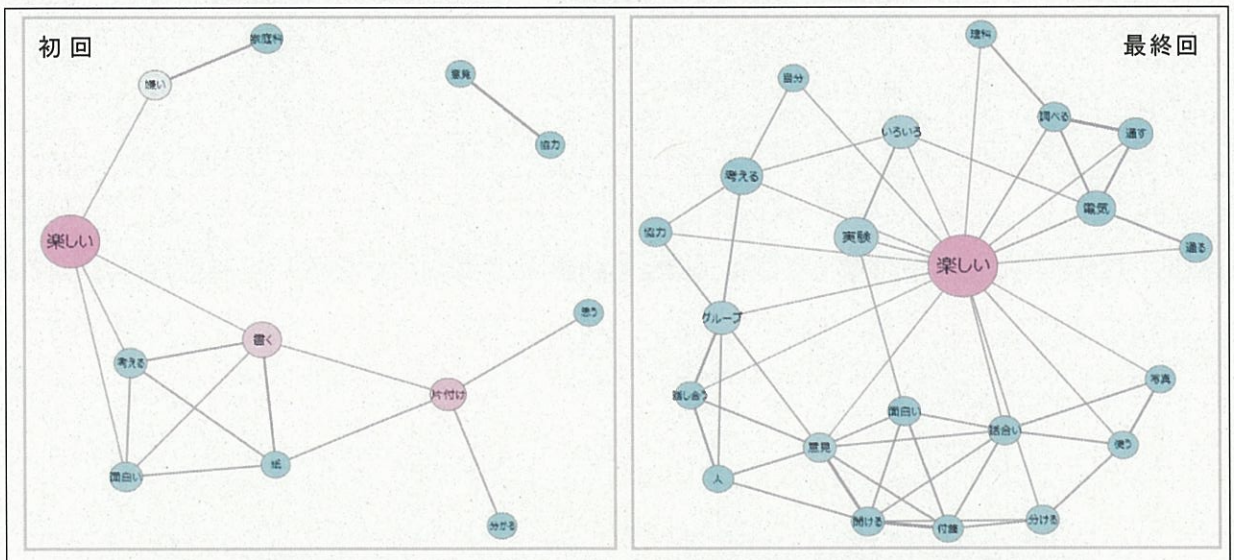


図２　協働学習の良さについて自由記述した内容の初回と最終回の共起関係の比較

以上より、Ｅ小学校の２年目教員同士が、協働学習を取り入れた授業づくりを進めてきたことで、児童が共に学び合う学習における楽しさを自覚し、友達の話や考えを主体的に聞こうする意識が高まったと考える。よって、協働的な授業づくりが授業力向上につながったと考える。

Ⅳ　その他

［キーワード］　小学校若手教員、授業力、アクティブ・ラーニング型研修、拠点校、成果の普及・定着

【問い合わせ先】
奈良県立教育研究所
教育経営部　研修企画係
〒636-0343　奈良県磯城郡田原本町秦庄22-1
Tel:0744-33-8905（ダイヤルイン）

国立大学法人奈良教育大学
〒630-8528　奈良市高畑町
Tel: 742-27-9240（前田研究室）